



TITLE:

高麗における軍令權の構造とその 變質

AUTHOR(S):

矢木, 毅

CITATION:

矢木, 毅. 高麗における軍令權の構造とその變質. 東方學報 1998, 70: 291-327

ISSUE DATE:

1998-03-27

URL:

<https://doi.org/10.14989/66795>

RIGHT:

高麗における軍令權の構造とその變質

矢 木 毅

はじめに	元一	三 司令官職の構成	三三
一 軍人層の構成	二五二	四 府兵の崩壊と私兵	三九
二 指揮官職の構成	二五九	おわりに	三六

はじめに

權力を管理するには、これを分割しておかなければならない。高麗前期における軍事權力は、武選・軍務・儀衛・郵驛の政を掌る尙書兵部や、出納・宿衛・軍機の政を掌る樞密院、そうして軍隊そのものの組織である二軍六衛などに分割して管理され、これを専制君主たる國王が總攬するという構成を取っていたが、このうち尙書兵部と樞密院との分立は、あたかも舊日本の明治憲法下における軍政と軍令との分立として理解することができるであろう。

武官人事その他の軍事行政（軍政）を掌る尙書兵部に對して、樞密院の掌るところは軍隊そのものにおける指揮・命令、すなわち軍事命令（軍令）に關する事柄である。もっとも樞密院が軍令を掌るとするのは、正確には國王の軍令を傳達する

ことを掌っているのであって、軍隊そのものを直接に指揮する権限は、平時には二軍六衛の各領の將軍に、戦時にはこの將軍を統轄する兵馬使に、それぞれ委ねられることになっていた。

このように高麗の軍事權力がさまざまな次元で周到に分割して管理されていたことは、言うまでもなく軍隊の私兵化や軍事クーデターの發生を豫防するための制度上の配慮に他ならない。そうしてこのさまざまな分割された軍事權力を最終的には國王一人が總攬することによって、高麗前期における中央集權的な軍事體制が確立していたものといえることができるであろう。

しかしこの中央集權的な軍事體制は、高麗後期に入ると打ち續く戦亂や國難に遭って崩壊し、高麗末期にはむしろ私兵の全盛とも稱すべきような分權的な軍事體制が形成されるまでに變化していつてしまう。本稿ではこうした變化を軍事權力の構造的な側面から、特に軍令權の構造の變質の過程として分析することを試みておきたい。

高麗末期の私兵勢力は、次に朝鮮初期の約數十年をかけて『經國大典』兵典に見られるような中央集權的な軍事體制へと打ち直されていくことになるのだが、そうした朝鮮初期の軍事體制を高麗朝のそれと比較する意味でも、まずは高麗朝そのものの軍事體制を構造的に明らかにしておいて、そこから如何にして私兵勢力が形成されるようになっていったかを考察しておきたいと思うのである。

一 軍人層の構成

軍隊を如何にして編成するかということは、軍令そのものというよりはむしろ軍政上の問題であるが、とはいえ軍隊の編成がなければ軍令そのものも意味を成さないもので、ここではまずそうした軍隊の編成に関する問題から考察したうえ

で、順次その指揮・命令のあり方へと考察を押し及ぼしていくことにしたい。

高麗國軍の主力は三十八領三萬八千人の軍人層によって構成されていたが、このことは『高麗史』李藏用傳に見える次の記述によって明らかであろう。

高麗に三十八領有り。領ごとに各々千人、通じて三萬八千人と爲す。^①

今この記述を『高麗史』兵志に見える兵制と比較してみると、兵志にいわゆる二軍六衛の内、左右衛・神虎衛・興威衛・金吾衛の四衛に分屬する保勝軍二十二領、精勇軍十六領、計三十八領の兵數が、あたかも李藏用傳に見える三十八領の兵數とびつたり一致していることに氣づくのである。ただし兵志、兵制、顯宗九年（一〇一八）九月條の記述によると、國王は宣化門に御して三衛・鷹揚軍・功臣子孫、及び文班六品以下の武藝あるものを集め、試して科等を定めたといひ、また『宣和奉使高麗圖經』仗衛の記述によると、高麗には「親衛」として龍虎衛・神虎衛・興威衛の三衛があったことが記述されているので、高麗前期の本來の兵制ではこの三十八領の保勝軍・精勇軍が龍虎衛・神虎衛・興威衛の三衛にのみ分屬し、金吾衛には分屬していなかったのではないかと考えられる。そうして左右衛は本來『高麗圖經』に見られるように龍虎衛と稱していたものが、その一部を後述する近仗軍としての龍虎軍に改組したことによって、龍虎軍以外の残りを左右衛と稱するようになったのではないかと考えられる。

このように三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍が本來どのような形で六衛に分屬していたのかは必ずしも明らかではないが、ともあれそれは中央の六衛に分屬して、高麗國軍における中核兵力としての機能を果たしていたのである。

ところでこの中央の六衛に分屬する三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍は、中央軍であると同時に、ある意味では州縣に居住する州縣軍としても記述されている。『高麗史』兵志、州縣軍條に見える高麗後期のある一時點における登録兵數

の記録^①によると、原則として王京への番上義務を免除されている邊境特別地域のいわゆる兩界を除いた交州道・楊廣道・慶尙道・全羅道・西海道の五道において、保勝軍八千六百一人、精勇軍一萬九千七百五十四人、合計二萬八千三百五十五人の軍人が、この時期軍籍上に登録されていたことが記録されているが、これらはその居住する州縣において登録されているとはいえ、制度の上では中央の六衛に分屬しているのであって、六衛の外に別個に州縣軍という軍隊が存在しているわけではない。^②つまり兵志、州縣軍條に記録されている實勢數としての保勝軍・精勇軍（合計二萬八千三百五十五人）は、そのまま定額としては三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍に該當するものとして理解しておかなければならないのである。^③

このように中央軍としての保勝軍・精勇軍が、同時に州縣軍としても記録されているというのは、彼らが番上時に王京に向いて軍役に従事するとともに、番休時には州縣に歸郷して農業に従事するいわゆる農民兵であったからに他ならない。高麗の兵制は一般に中國唐朝の府兵制度に倣ったものといわれているが、この府兵制度においては地方の折衝府から中央の諸衛へと府兵が番上してくる制度になっていた。^④高麗の保勝軍・精勇軍が、これと同じように地方から番上してくる農民兵であったことは、高麗初期に唐制に倣った折衝府が存在していた事實によって、當然のこととして類推されなければならないのである。

『高麗史』食貨志、田制、穆宗元年（九九八）條の記述によると、兩班官人、及び軍人に對する領地（兩班田・軍人田）の給田額を規定した穆宗朝の田制において、折衝都尉（田六十結・柴三十三結）、果毅都尉（田五十五結・柴三十結）、別將（田四十結・柴二十結）、諸尉校尉（田三十結・柴十結）、諸尉隊正（田二十七結）として、それぞれ折衝府の官人に對する給田が行われていることが明記されている。^⑤また『高麗史』成宗世家、九年（九九〇）九月丙子條の一節にも、「折衝府別將趙英」という人物が孝子としての褒賞を受けたことが明記されているので、これらの史料から高麗初期に唐制に倣った折衝府が存在してい

た事實は、ほぼ間違いない確認することができるであろう。

ただしこの高麗初期における折衝府から、一體どれだけの軍人が、一體どれだけの番次を以って上京してきていたのかは、残念ながら、いまひとつ明らかにすることができない。後代朝鮮朝における『世宗實錄』二十年（一四三八）九月壬辰條の記述によると、中央軍における各領の下級の指揮官（六十）の下には領ごとに二百人の使令（卒徒僕從）が配屬されていたとの記録もあるので、假にこの數字が高麗朝以來のものであるとすれば、各領一千人の軍人層は、每番二百人の五番に分かれ、三十八領三萬八千人の全體の内では、七千六百人が當番兵として王京において軍役に従事していたと考えておくこともできるであろう。もとよりこれは假説の上での數字であるが、朝鮮朝における王京への番上兵の當番數が、全體として一萬人に満たなかったことを勘案すれば、高麗朝・朝鮮朝の國力としては、大體妥當な數字ではないかと思うのである。

もう一つ、高麗の保勝軍・精勇軍が番上制による軍隊であったことについては、先にも觸れた穆宗朝の田制の内容が、間接的なながらも有力な證據となってくれている。穆宗朝の田制によると、いわゆる軍人の内、馬軍には田二十三結、歩軍には田二十結が、それぞれ領地（軍人田）として分給される制度になっているが、ここで假に穆宗朝における歩軍の田二十結を、三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍に一律に分給したと想定した場合、その軍人田の總額は田七十六萬結、すなわち全國總田結數のほとんどすべてにまで達してしまう。従って、軍人田の分給は當初から定額どおりには行われていなかった、というのが從來の通説であるが、この通説では三十八領三萬八千人の軍人のすべてに一律に軍人田を分給すると想定しているところに、そもそも根本的な誤解があるのではないか。

軍人田において、いわゆる收租權の分給を受けるのは軍人のなかでも王京に番上している當番兵のみであり、番休時の軍人田は祿轉・軍資などの名目において、國家による收租の對象となっていたのであろう。このように想定すれば、軍人

田の總額は田七十六萬結のうちの極一部——假に五番交代と想定すれば、その五分の一の十五萬二千結——にしか過ぎないことになるのであって、これならば高麗の全國總田結數のなかでも十分に分給可能な數字である。

このように、高麗の軍人田は三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍のうち、その番上制による當番兵のみを対象として給田額を設定しているのであって、逆に言えばこのように設定されている給田額のありようからも、三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍が、その全員を王京に常駐させる長番制の軍隊ではなく、一部分のみを交替して王京に立役させる番上制の軍隊であったことが分かるのである。

もっとも高麗初期に存在した折衝府の官制は、早くも文宗朝頃になると制度の上では消滅してしまっている。『高麗史』食貨志、田制、文宗三十年（一〇七六）條の記述によると、穆宗朝の田制を更定した文宗朝の田制においては、別將（田四十結・柴十二結）、校尉（田三十五結・柴八結）、隊正（田三十結・柴五結）に對する給田額は規定されているものの、折衝都尉・果毅都尉に對する給田額は規定されていない。^⑮つまり折衝府の官制は消滅してしまっているのである。

これは恐らくは成宗朝以降、文宗朝に至るまでの間に、次第に整備されていった地方行政官としての守令によって、折衝都尉・果毅都尉の職掌が代行されていったことの結果であろう。この場合、番休時の保勝軍・精勇軍は、折衝府の撤廢以後は新しく守令の指揮下に置かれることになったものと考えられる。折衝府撤廢の理由については一切不明であるが、恐らく當時の高麗朝の國力では、軍政官としての折衝都尉・果毅都尉と民政官としての守令とを併存させることは不可能であったし、また不必要なことでもあったのであろう。

折衝府の撤廢以後、守令が折衝都尉・果毅都尉の職掌を代行していくようになったことについては、折衝府の遺制として残った別將・校尉・隊正などの官制が、一部には中央の六衛の官制として殘存するとともに、^⑯一部には地方守令の配下

の郷吏階層の職制としても残存していることによって確認することができる。

『高麗史』兵志、兵制、文宗二十三年（一〇六九）三月條の記述によると、諸州の一品軍（後述）の別將は副戸長以上の郷吏を以て、同じく校尉は兵倉正・戸正・食祿正・公須正の郷吏を以て、同じく隊正は副兵倉正・副戸正・諸壇正の郷吏を以て、それぞれ弓科で試選して任命することになっていた^①。また後代朝鮮朝の『世宗實錄』二十年（一四三八）四月甲寅朔條の記述によると、郷吏階層のうちの軍隊を指揮する「都軍」は、高麗以來、中央の武班に比擬して都令（都領）、別正（別將）、校尉などの稱號を用いていた^②。

そもそも折衝府の兵力は、新羅末のいわゆる後三國期に各地に廣汎に擡頭していった地方豪族勢力の率いる鄉村兵力を、高麗の王權の下に吸収・再編していくことによって成り立ったものと考えられるので、折衝府の官人というのもその多くは在地社會の豪族をそのまま任用する制度になっていたのではないかと考えられる。郷吏階層というのはそうした地方豪族勢力の末裔であるから、その彼らが別將・校尉・隊正などの武班の稱號を用いているというのは、『世宗實錄』に言うように單に中央の官制に比擬しているということではなくて、むしろ折衝府の遺制として彼らが引き繼いでいった稱號なのであると考えるおかなければならないであろう。

ただし折衝都尉・果毅都尉などの稱號は、郷吏階層によっては引き繼がれることがなかったが、それは恐らくは折衝都尉・果毅都尉などが中央から派遣される官人であったため、もしくは在地に退休している中央官人身分のものを任用する制度であったためで、そうした中央身分の官人層が、別將以下の折衝府の官人層、すなわち郷吏階層を統率することになっていたのであろう。そうしてこのような折衝都尉・果毅都尉の職掌が、折衝府の撤廢以後は、同じく中央から派遣されてくる守令によって引き繼がれていくことになるのである。

保勝軍・精勇軍以外の軍隊についても最後に簡単に觸れておこう。『高麗史』兵志によると、保勝軍二十二領、精勇軍十六領の合計三十八領以外にも、高麗の二軍六衛には鷹揚軍一領、龍虎軍二領、金吾衛役領一領、千牛衛常領一領、千牛衛海領一領、監門衛一領の、合計七領の軍隊が存在していたといわれている。

このうち、鷹揚・龍虎の二軍は國王に近侍する儀仗部隊、いわゆる近仗軍で、『高麗圖經』に見える「控鶴軍」というのは、恐らくはこの近仗軍としての鷹揚軍・龍虎軍のことをいうのであろう。¹⁹ 近仗軍というのはその名のとおり、儀禮・警護のために國王の身邊に配備される儀仗部隊のことであるが、『高麗史』兵志、兵制、文宗四年（一〇五〇）條の記述によると、その近仗軍の將校（校尉・隊正）は諸領府の將校の中から「身彩有り、功勞多き者」を、國王自らが選んで充差したといふから、²⁰ その配下の三領三千人の軍人についても、保勝軍・精勇軍その他の軍隊の中から特に選拔された優秀な軍人によって編成されていたのではないかと考えられる。これらは容貌・武藝ともに優れた軍人によって編成される、いわば國王の近衛部隊として位置づけることができるであろう。

また、金吾衛・千牛衛は『高麗圖經』には「仗衛軍」として記述されているので、²¹ これらもまた儀禮・警護のために國王の身邊に配備される儀仗部隊として理解しておけばよいであろう。唐制、千牛備身、備身左右、および太子千牛は、みな三品以上職事官の子孫、四品清官の子で、儀容端正、武藝稱すべきものを取って充てたといふから、²² 高麗の金吾衛・千牛衛もまた、主として兩班子弟などによって編成されることになっていたのでないかと考えられる。

監門衛は、年老・身病者などが入屬する比較的役務の軽い軍隊で、その名のとおり、王城門・宮城門に當直して監守を務めるのが仕事である。²³

以上の鷹揚軍・龍虎軍・金吾衛・千牛衛・監門衛などは、番上兵である保勝軍・精勇軍とは違ってその全員が王京に常駐している長番兵であつたのではないかと想像されるが、この點については具體的な論據はないので今後の検討に俟たな

ければならない。

なお以上の中央軍以外にも、各州縣には一品軍、二品軍、三品軍と呼ばれる地方軍が存在した。一品軍は地方軍のなかでは例外的に王京への番上の義務を持つ軍隊で、大體二番交替で農閑期に王京に番上し、一定期間、各種の工役に従事する勞役部隊（役軍）として付置づけられていたのではないかと考えられる。²³二品軍、三品軍はそれより更に格下の、原則として王京への番上の義務は負わない軍隊であつて、恐らくは各軍目道の主鎮に番上するものを二品軍、居住地州縣にのみ番上するものを三品軍と²⁴いて區別していたのであろう。これらもまた恐らくは農閑期に各種の工役に従事する勞役部隊として位置づけられていたのであつて、結局地方軍というのは戦闘部隊というよりは、専ら勞役部隊として位置づけられていたと見るのが妥當である。

もとよりこれらの地方軍もまた、保勝軍・精勇軍と同じように、番休時には農業に従事するいわゆる農民兵として位置づけられていたことは言うまでもあるまい。

二 指揮官職の構成

軍人層の構成については前節においてだいたひ考察を盡くしたので、次にはその軍隊を指揮する指揮官職の構成について検討してみることしよう。

前節にも述べたとおり、三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍は番休時には居住地州縣に歸農して折衝府ないし守令の指揮下に置かれることになっていたが、番上時の彼らは王京に向ひて中央六衛の直接の指揮下に入ることになっていた。そこでこの六衛にはそれぞれ上將軍・大將軍という指揮官職が設けられており、またこの六衛に分屬する各領には、

それぞれ將軍・中郎將・郎將・別將・散員・校尉・隊正という各級の指揮官職が設けられているが、とはいえこれらの指揮官職は、その軍隊に對する權限において、必ずしも等質の存在として位置づけられていたわけではない。

まず諸衛の最上級の指揮官職は上將軍（正三品）と大將軍（從三品）とであり、これに續く上級・中級の指揮官職は將軍（正四品）、中郎將（正五品）、郎將（正六品）、別將（正七品）、散員（正八品）であるが、このうち諸衛の上大將軍は實際には軍令權を持たない形式だけの指揮官職で、軍隊の直接の指揮は専ら將軍以下の各領の指揮官職の方に委ねられることになっていた。

後代朝鮮朝の『太祖實錄』三年（一二九四）二月己亥條に見える鄭道傳の上疏の一款は、この點を明確に指摘して次のように論じている。

兵を將いる者、位卑しければ則ち上命に順從し、役使に易く、安んじてその分を守る。……前朝、中樞・兵曹・上大將軍ありといえども、兵を掌る者は將軍なり。これ長治久安の策なり。本朝府兵の制、すでにこの意有り。將軍をして五員・十將・六十尉正を掌らしめ、その大將軍以上はこれに與かる無し。²⁶⁾

つまり各領の軍隊を直接に指揮しているのは將軍であって、上大將軍は直接の指揮には關與しない形式だけの指揮官職にしか過ぎなかったというのである。

右の鄭道傳の指摘を、念のため高麗時代の幾つかの同時代的史料を通して確認してみることしよう。例えば『高麗史』李資謙傳の記述によると、仁宗四年（一二二六）のいわゆる丙午の變において拓俊京が宮城を犯した際、李資謙は將軍劉漢卿の配下の中郎將洪立功という人物を借將軍に任命し、兵を率いて拓俊京の指揮・命令に従わせている。²⁷⁾これは本來各領の軍隊を指揮すべき將軍の劉漢卿が宮城内に入直して不在であったために、中郎將の洪立功を臨時の將軍（借將軍）としてその職掌を代行させているわけであるが、ここで洪立功をわざわざ借將軍に任命しているというところに、部隊指揮官と

しての將軍の位置づけが、何より端的に示されているといつてよいであろう。

また『高麗史』明宗世家、十一年（一一八二）七月己卯條の記述によると、このころ王宮（壽昌宮）において何者かが投石し、それが國王寢室の北窓にまで達するという事件があったので、重房（上大將軍）の奏請により、毎夜一將軍が配下の軍校（軍人・將校）を率いて宮門外その他の要害の處を警備するという措置が取られている。²⁸ここでも軍人・將校を直接に指揮しているのは將軍である。

さらに高麗時代の各種の墓誌史料などを通覽すると、そこでは武臣の履歷を記述する際に、しばしば「將軍某下の某職」に任じられたという記述形態が取られていることに注目したい。例えば『韓國金石全文』三七五に見える申甫純という人物は、毅宗元年（一一四七）、二十五歳にして「會冲下隊正」の職を受け、六年（一一二五）には「珍守下校尉」、十五年（一一六二）には「崔清下散員」、十九年（一一六五）には「彦清下別將」に、それぞれ拜せられているが、この會冲・珍守・崔清・彦清などがそれぞれ申甫純の直接の指揮を取った將軍の名前であることは、同じく『韓國金石全文』四五五に見える金仲龜という人物が「將軍純永下郎將」を加えられたという事例や、例の洪立功が「將軍劉漢卿下中郎將」として記述されている事例などと對比して見れば、容易に想像がつくであろう。

以上、いずれの事例においても軍隊を直接に指揮しているのは將軍であり、諸衛の上大將軍はこれを名目上統轄しているだけの形式的な指揮官職にしか過ぎなかったということが分かるのである。

なるほど明宗十一年（一一八二）の事例においては、將軍の配備に關して重房（上大將軍）がある一定の關與を行っているが、それは國王に對して軍令を奏請し、その國王の軍令を將軍に傳達するという専ら政策的な局面に限つての事柄である。いわゆる武臣の亂以降、高麗後期に入って重房の發言力が増大していったことは事實であるが、それはあくまでも政治的な意味での發言力であつて、高麗後期においても、上大將軍がその本來の職掌において軍隊を直接に指揮するというこ

とはなかったのである。

上大將軍という最上級の武官が軍隊を直接に掌握するようになった場合、威望の高い彼らにあっては軍隊が私兵化される恐れがあり、延いては軍事クーデターの引き金ともなる恐れがある。かれらを軍隊の直接の指揮系統から外しておくことは、そのような動きをあらかじめ封殺するための制度上の配慮として評価しておくことができるであろう。

次に、將軍以下・散員以上の各領の上級・中級の指揮官職と、それに續く校尉（正九品、隊正（流外）の下級の指揮官職）について考察すると、この兩者の間には、その身分構成上、いわゆる士庶の區別——貴族と平民との分界線——が設けられていたという事實に特に注目しておかなければならないであろう。

朝鮮初期の兵制では、正九品の隊長・隊副（舊の校尉・隊正）と正八品の副司正（舊の散員）との間には一つの身分上の分界線が設けられており、隊長・隊副は「流外庶人の職」として、副司正以上の兩班官人の職とは區別されていた。このため兩班子弟が起家する場合には、おおむね正九品の隊長・隊副をとばして正八品の副司正に任命されることが一般的な慣例となっていたが、これはなにも朝鮮初期に始まったことではなく、すでに高麗時代からそのような士庶の區別は存在していたのである。

散員の服は、紫羅窄衣、幘頭草履。中華の班直・殿侍の如きの類なり。武臣の子弟、兵衛の出職は、皆これに補す。³²

宋人徐兢の撰述した右の『高麗圖經』阜隸、散員の條の記述によれば、兩班子弟が初めて西班牙職に任命される場合（武臣子弟）と、一般軍人がその軍役を勤め上げて初めて西班牙職に任命される場合（兵衛出職）とは、いずれも校尉・隊正ではなく正八品の散員の職に任命される慣例であったという。³³従って徐兢の目には校尉・隊正は正式の西班牙職としては映っておらず、一般軍人の延長として——いわば下士官職として——映っていたということになるであろう。

高麗肅宗朝の儀制において、散員以上を東班參外に准じ、校尉・隊正を人吏（庶人在官者）に准じてその待遇を規定しているのも、散員以上と校尉・隊正との間に嚴に存在するこのような身分的な差別意識を儀制面において體系化したものにも他ならないのである。⁴⁴⁾

このように散員以上と校尉・隊正との間にいわゆる士庶の區別が設けられていることは、一つには散員・校尉・隊正という官職名そのものの由來から言っても説明することができるのではないかと思う。

そもそも諸衛各領の指揮官職が中國唐朝の制度を繼受しているなかであって、ひとり散員だけは五代宋初の官制であって、唐制を繼受したものではない。『宋史』兵志、禁軍の記述によると、散員というのは宋初における禁軍騎軍の中の一つの軍額であり、この軍額はもともとは五代後周において、諸州の豪傑を招置して立てた軍隊に由來するものであったといわれている。⁴⁵⁾ 豪傑を招置して立てた軍隊が、にもかかわらず散員——特に職掌を持たないもの——という名稱を與えられているのは、その軍隊としての活用よりも、むしろそうした豪傑を在地社會から切り離し、中央に招置しておくこと自體の中に、軍事權力の集中を圖るための政治的な意圖が込められていたということに他なるまい。

高麗における散員もまた、この五代後周における散員と同じように、地方の豪族層を中央に招置して、これを中央官人へと轉化させていく過程において成立した官制であったと考えておくことができるであろう。高麗初期におけるいわゆる地方豪族勢力のうち、その下層のものは在地社會に留まって折衝府の官人（別將・校尉・隊正）として組織され、その上層のものは中央に進出して六衛の官人（散員以上）として組織されていたのであるが、その後、地方の折衝府が守令にその職掌を讓って解體されると、折衝府の官人はその一部（別將・校尉・隊正）が六衛に直屬して中央官人化するとともに、他の一部（一品別將・校尉・隊正）は地方に残留して郷吏階層の一翼を形成するようになっていったのであろう。

このような階層分化の過程を想定すれば、各領の校尉・隊正が、中央官人化したとはいえ依然として「流外庶人の職」

として取り扱われ續けていたというのも十分に納得のいく事柄である。散員より上の正七品に位置づけられた別將は別格として、もともと折衝府の官人であつた校尉・隊正は、本源的には地方の郷吏階層（一品別將・校尉・隊正）と同一の存在であり、だからこそ校尉・隊正は「流外庶人の職」として、散員以上の兩班官人の職とは區別される待遇に甘んじなければならなかつたのである。

以上、諸衛の指揮官職の構成を通覽すると、結局、番上時の保勝軍・精勇軍を直接に指揮するものは各領の將軍であり、その將軍を補佐する中郎將以下・散員以上の武官であつたということになるであらう。それ以外の上大將軍は各領を統轄する形式だけの指揮官職にしか過ぎなかつたし、校尉・隊正は指揮官というよりは、半ば軍人層と等質の下士官といった方がその性格にはふさわしいようである。

『高麗史』百官志に見える指揮官職の員額は、二軍六衛についてそれぞれ上將軍一人、大將軍一人の計十六人。四十五領（保勝軍二十二領、精勇軍十六領、その他七領）についてそれぞれ將軍一人、中郎將二人、郎將五人、別將五人、散員五人、校尉二十人、隊正四十人の計三千五百十人。總計三千五百二十六人となっているが、これがもともとの員額であつたかどうかは、なお検討の餘地もあるかと思ふ。³⁶⁾

ともあれ、この三千五百二十六人の武官は中央官人としてその全員が王京に常駐し、そのかれらが地方から番上してくる毎番七千六百人ほどの一般軍人層、及び七領七千人ほどの長番軍人層を指揮する構成になつていたのである。

三 司令官職の構成

平時における指揮官職の構成を検討したうえで、今度はその戰時における司令官職の構成について検討してみよう。

すでに前節において検討したとおり、各領の軍隊は番休時には州縣の折衝府ないし守令の指揮下に置かれ、番上時には各領の將軍の指揮下に置かれることになっていたが、戰時にはこの各領の番上兵・番休兵のすべて——もしくはその必要部分——が召集され、これを數領ごとに束ねて新しく三軍の作戰軍が編成される。②⑦ ②⑧ ②⑨ ③① ③② ③③ ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑧ ③⑨ ④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ⑤① ⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑩① ⑩② ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥ ⑩⑦ ⑩⑧ ⑩⑨ ⑪① ⑪② ⑪③ ⑪④ ⑪⑤ ⑪⑥ ⑪⑦ ⑪⑧ ⑪⑨ ⑫① ⑫② ⑫③ ⑫④ ⑫⑤ ⑫⑥ ⑫⑦ ⑫⑧ ⑫⑨ ⑬① ⑬② ⑬③ ⑬④ ⑬⑤ ⑬⑥ ⑬⑦ ⑬⑧ ⑬⑨ ⑭① ⑭② ⑭③ ⑭④ ⑭⑤ ⑭⑥ ⑭⑦ ⑭⑧ ⑭⑨ ⑮① ⑮② ⑮③ ⑮④ ⑮⑤ ⑮⑥ ⑮⑦ ⑮⑧ ⑮⑨ ⑯① ⑯② ⑯③ ⑯④ ⑯⑤ ⑯⑥ ⑯⑦ ⑯⑧ ⑯⑨ ⑰① ⑰② ⑰③ ⑰④ ⑰⑤ ⑰⑥ ⑰⑦ ⑰⑧ ⑰⑨ ⑱① ⑱② ⑱③ ⑱④ ⑱⑤ ⑱⑥ ⑱⑦ ⑱⑧ ⑱⑨ ⑲① ⑲② ⑲③ ⑲④ ⑲⑤ ⑲⑥ ⑲⑦ ⑲⑧ ⑲⑨ ⑳① ⑳② ⑳③ ⑳④ ⑳⑤ ⑳⑥ ⑳⑦ ⑳⑧ ⑳⑨ ㉑① ㉑② ㉑③ ㉑④ ㉑⑤ ㉑⑥ ㉑⑦ ㉑⑧ ㉑⑨ ㉒① ㉒② ㉒③ ㉒④ ㉒⑤ ㉒⑥ ㉒⑦ ㉒⑧ ㉒⑨ ㉓① ㉓② ㉓③ ㉓④ ㉓⑤ ㉓⑥ ㉓⑦ ㉓⑧ ㉓⑨ ㉔① ㉔② ㉔③ ㉔④ ㉔⑤ ㉔⑥ ㉔⑦ ㉔⑧ ㉔⑨ ㉕① ㉕② ㉕③ ㉕④ ㉕⑤ ㉕⑥ ㉕⑦ ㉕⑧ ㉕⑨ ㉖① ㉖② ㉖③ ㉖④ ㉖⑤ ㉖⑥ ㉖⑦ ㉖⑧ ㉖⑨ ㉗① ㉗② ㉗③ ㉗④ ㉗⑤ ㉗⑥ ㉗⑦ ㉗⑧ ㉗⑨ ㉘① ㉘② ㉘③ ㉘④ ㉘⑤ ㉘⑥ ㉘⑦ ㉘⑧ ㉘⑨ ㉙① ㉙② ㉙③ ㉙④ ㉙⑤ ㉙⑥ ㉙⑦ ㉙⑧ ㉙⑨ ㉚① ㉚② ㉚③ ㉚④ ㉚⑤ ㉚⑥ ㉚⑦ ㉚⑧ ㉚⑨ ㉛① ㉛② ㉛③ ㉛④ ㉛⑤ ㉛⑥ ㉛⑦ ㉛⑧ ㉛⑨ ㉜① ㉜② ㉜③ ㉜④ ㉜⑤ ㉜⑥ ㉜⑦ ㉜⑧ ㉜⑨ ㉝① ㉝② ㉝③ ㉝④ ㉝⑤ ㉝⑥ ㉝⑦ ㉝⑧ ㉝⑨ ㉞① ㉞② ㉞③ ㉞④ ㉞⑤ ㉞⑥ ㉞⑦ ㉞⑧ ㉞⑨ ㉟① ㉟② ㉟③ ㉟④ ㉟⑤ ㉟⑥ ㉟⑦ ㉟⑧ ㉟⑨ ㊱① ㊱② ㊱③ ㊱④ ㊱⑤ ㊱⑥ ㊱⑦ ㊱⑧ ㊱⑨ ㊲① ㊲② ㊲③ ㊲④ ㊲⑤ ㊲⑥ ㊲⑦ ㊲⑧ ㊲⑨ ㊳① ㊳② ㊳③ ㊳④ ㊳⑤ ㊳⑥ ㊳⑦ ㊳⑧ ㊳⑨ ㊴① ㊴② ㊴③ ㊴④ ㊴⑤ ㊴⑥ ㊴⑦ ㊴⑧ ㊴⑨ ㊵① ㊵② ㊵③ ㊵④ ㊵⑤ ㊵⑥ ㊵⑦ ㊵⑧ ㊵⑨ ㊶① ㊶② ㊶③ ㊶④ ㊶⑤ ㊶⑥ ㊶⑦ ㊶⑧ ㊶⑨ ㊷① ㊷② ㊷③ ㊷④ ㊷⑤ ㊷⑥ ㊷⑦ ㊷⑧ ㊷⑨ ㊸① ㊸② ㊸③ ㊸④ ㊸⑤ ㊸⑥ ㊸⑦ ㊸⑧ ㊸⑨ ㊹① ㊹② ㊹③ ㊹④ ㊹⑤ ㊹⑥ ㊹⑦ ㊹⑧ ㊹⑨ ㊺① ㊺② ㊺③ ㊺④ ㊺⑤ ㊺⑥ ㊺⑦ ㊺⑧ ㊺⑨ ㊻① ㊻② ㊻③ ㊻④ ㊻⑤ ㊻⑥ ㊻⑦ ㊻⑧ ㊻⑨ ㊼① ㊼② ㊼③ ㊼④ ㊼⑤ ㊼⑥ ㊼⑦ ㊼⑧ ㊼⑨ ㊽① ㊽② ㊽③ ㊽④ ㊽⑤ ㊽⑥ ㊽⑦ ㊽⑧ ㊽⑨ ㊾① ㊾② ㊾③ ㊾④ ㊾⑤ ㊾⑥ ㊾⑦ ㊾⑧ ㊾⑨ ㊿① ㊿② ㊿③ ㊿④ ㊿⑤ ㊿⑥ ㊿⑦ ㊿⑧ ㊿⑨

高麗後期に入ってから事例ではあるが、例えば『高麗史』明宗世家、七年（一一七七）九月辛丑條の記述によると、西北路兵馬使に任命された李義旼は、八將軍、すなわち八領の軍隊を率いて西北賊の討伐に派遣されたことが記録されている。③⑨ ④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ⑤① ⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑩① ⑩② ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥ ⑩⑦ ⑩⑧ ⑩⑨ ⑪① ⑪② ⑪③ ⑪④ ⑪⑤ ⑪⑥ ⑪⑦ ⑪⑧ ⑪⑨ ⑫① ⑫② ⑫③ ⑫④ ⑫⑤ ⑫⑥ ⑫⑦ ⑫⑧ ⑫⑨ ⑬① ⑬② ⑬③ ⑬④ ⑬⑤ ⑬⑥ ⑬⑦ ⑬⑧ ⑬⑨ ⑭① ⑭② ⑭③ ⑭④ ⑭⑤ ⑭⑥ ⑭⑦ ⑭⑧ ⑭⑨ ⑮① ⑮② ⑮③ ⑮④ ⑮⑤ ⑮⑥ ⑮⑦ ⑮⑧ ⑮⑨ ⑯① ⑯② ⑯③ ⑯④ ⑯⑤ ⑯⑥ ⑯⑦ ⑯⑧ ⑯⑨ ⑰① ⑰② ⑰③ ⑰④ ⑰⑤ ⑰⑥ ⑰⑦ ⑰⑧ ⑰⑨ ⑱① ⑱② ⑱③ ⑱④ ⑱⑤ ⑱⑥ ⑱⑦ ⑱⑧ ⑱⑨ ⑲① ⑲② ⑲③ ⑲④ ⑲⑤ ⑲⑥ ⑲⑦ ⑲⑧ ⑲⑨ ⑳① ⑳② ⑳③ ⑳④ ⑳⑤ ⑳⑥ ⑳⑦ ⑳⑧ ⑳⑨ ㉑① ㉑② ㉑③ ㉑④ ㉑⑤ ㉑⑥ ㉑⑦ ㉑⑧ ㉑⑨ ㉒① ㉒② ㉒③ ㉒④ ㉒⑤ ㉒⑥ ㉒⑦ ㉒⑧ ㉒⑨ ㉓① ㉓② ㉓③ ㉓④ ㉓⑤ ㉓⑥ ㉓⑦ ㉓⑧ ㉓⑨ ㉔① ㉔② ㉔③ ㉔④ ㉔⑤ ㉔⑥ ㉔⑦ ㉔⑧ ㉔⑨ ㉕① ㉕② ㉕③ ㉕④ ㉕⑤ ㉕⑥ ㉕⑦ ㉕⑧ ㉕⑨ ㉖① ㉖② ㉖③ ㉖④ ㉖⑤ ㉖⑥ ㉖⑦ ㉖⑧ ㉖⑨ ㉗① ㉗② ㉗③ ㉗④ ㉗⑤ ㉗⑥ ㉗⑦ ㉗⑧ ㉗⑨ ㉘① ㉘② ㉘③ ㉘④ ㉘⑤ ㉘⑥ ㉘⑦ ㉘⑧ ㉘⑨ ㉙① ㉙② ㉙③ ㉙④ ㉙⑤ ㉙⑥ ㉙⑦ ㉙⑧ ㉙⑨ ㉚① ㉚② ㉚③ ㉚④ ㉚⑤ ㉚⑥ ㉚⑦ ㉚⑧ ㉚⑨ ㉛① ㉛② ㉛③ ㉛④ ㉛⑤ ㉛⑥ ㉛⑦ ㉛⑧ ㉛⑨ ㉜① ㉜② ㉜③ ㉜④ ㉜⑤ ㉜⑥ ㉜⑦ ㉜⑧ ㉜⑨ ㉝① ㉝② ㉝③ ㉝④ ㉝⑤ ㉝⑥ ㉝⑦ ㉝⑧ ㉝⑨ ㉞① ㉞② ㉞③ ㉞④ ㉞⑤ ㉞⑥ ㉞⑦ ㉞⑧ ㉞⑨ ㉟① ㉟② ㉟③ ㉟④ ㉟⑤ ㉟⑥ ㉟⑦ ㉟⑧ ㉟⑨ ㊱① ㊱② ㊱③ ㊱④ ㊱⑤ ㊱⑥ ㊱⑦ ㊱⑧ ㊱⑨ ㊲① ㊲② ㊲③ ㊲④ ㊲⑤ ㊲⑥ ㊲⑦ ㊲⑧ ㊲⑨ ㊳① ㊳② ㊳③ ㊳④ ㊳⑤ ㊳⑥ ㊳⑦ ㊳⑧ ㊳⑨ ㊴① ㊴② ㊴③ ㊴④ ㊴⑤ ㊴⑥ ㊴⑦ ㊴⑧ ㊴⑨ ㊵① ㊵② ㊵③ ㊵④ ㊵⑤ ㊵⑥ ㊵⑦ ㊵⑧ ㊵⑨ ㊶① ㊶② ㊶③ ㊶④ ㊶⑤ ㊶⑥ ㊶⑦ ㊶⑧ ㊶⑨ ㊷① ㊷② ㊷③ ㊷④ ㊷⑤ ㊷⑥ ㊷⑦ ㊷⑧ ㊷⑨ ㊸① ㊸② ㊸③ ㊸④ ㊸⑤ ㊸⑥ ㊸⑦ ㊸⑧ ㊸⑨ ㊹① ㊹② ㊹③ ㊹④ ㊹⑤ ㊹⑥ ㊹⑦ ㊹⑧ ㊹⑨ ㊺① ㊺② ㊺③ ㊺④ ㊺⑤ ㊺⑥ ㊺⑦ ㊺⑧ ㊺⑨ ㊻① ㊻② ㊻③ ㊻④ ㊻⑤ ㊻⑥ ㊻⑦ ㊻⑧ ㊻⑨ ㊼① ㊼② ㊼③ ㊼④ ㊼⑤ ㊼⑥ ㊼⑦ ㊼⑧ ㊼⑨ ㊽① ㊽② ㊽③ ㊽④ ㊽⑤ ㊽⑥ ㊽⑦ ㊽⑧ ㊽⑨ ㊾① ㊾② ㊾③ ㊾④ ㊾⑤ ㊾⑥ ㊾⑦ ㊾⑧ ㊾⑨ ㊿① ㊿② ㊿③ ㊿④ ㊿⑤ ㊿⑥ ㊿⑦ ㊿⑧ ㊿⑨

また前節にも検討した例の洪立功の事例において、借將軍の洪立功が軍人六十餘人を率いて拓俊卿の指揮下に入ったというのも、變則的な事例とはいえ、將軍（洪立功）の率いる各領の軍隊と、その將軍を統轄する軍司令官（拓俊卿）との關係

を示す史料として活用することができるとは思はないかと考えられる。^④

このように、各領の軍隊を直接に掌握し、平時・戦時を通じてその軍人層と苦樂を共にしている部隊指揮官としての將軍に對し、兵馬使の方はこの將軍を通して、戦時にのみ軍人層に對する命令權を行使しているに過ぎないのであって、その點、兵馬使の軍隊に對する關係は、あくまでも間接的かつ臨時的なものとしての限界を持たなければならなかったのである。

強大な權力を行使することになる軍司令官は、それだけに軍隊とは癒着してはならない存在として位置づけられていたことを、まずは第一に確認しておかなければなるまい。

作戰軍を派遣する場合、事はまず軍令權を總攬する國王が軍隊に對して動員をかけるというところから始まっていく。國王の軍令はまず宿衛の任を掌る樞密院を経由して諸衛の上大將軍に下され、上大將軍から各領の將軍に下されて、はじめて各領の軍人が召集されるということになるのである。國王が各領の軍隊に對していつでも動員をかけられるように、樞密院の宰相（樞密）や上大將軍などは、そのうちの何人かが輪番して常に宮中に入直していなければならないことになつていたはずである。

また地方州縣に居住している下番の軍人をも含めたより大規模な動員をかける場合には、中書門下の宰相（宰臣）を経由して兵部に軍令を下し、兵部から州縣の守令に軍令を下して下番の軍人を召集するという手續きが踏まれていたのではないかと想像される。

ともあれ、こうして軍隊を召集すると、次にはその軍隊を統轄するために、臨時に軍司令官としての兵馬使を任命するという運びとなる。もちろん軍司令官を任命したうえで、その後から軍隊を召集するという場合もあったであろう。いず

れにせよ、この動員された軍隊を統轄するための軍司令官が任命されると、以後、作戰軍の軍人はその作戰期間に限って軍司令官による專制的な軍令の下に置かれることになるのである。

では、そのような專制的な軍令權を擔うことになる軍司令官は、具體的には一體どのように人選されていたのであろうか。高麗の兵馬使が原則として文武三品以上の官人の中から任命される制度になっていたことは、前にも述べたとおりであるが、すでに邊太變氏の研究によっても明らかにされているとおり、高麗前期の兵馬使は實際にはその多くが儒將——いわゆる科擧出身の文臣官僚——を以て任命されていたところに、その最も著しい特色がある。

例えば文宗三十四年（一〇八〇）十二月に高麗國が定州城外の東女眞部落を攻略した際に、その作戰軍は中書侍郎平章事文正を總司令官とする次のような三軍の編成を取っていた。⁽⁴³⁾

中書侍郎平章事文正（判行營兵馬事）

同知中樞院事崔奭（兵馬使）

兵部尙書廉漢（兵馬使）

左承宣李顥（兵馬副使）

ここでは恐らくは文正が中軍、崔奭が左軍、廉漢が右軍の、それぞれ軍司令官として位置づけられていたのであろう。そうして中軍司令官の文正は同時に三軍全體の總司令官をも兼ねているために、中軍の事實上の指揮は兵馬副使の李顥に委ねられていたのではないかと考えられる。右の四人のうち、文正はいわゆる科擧官僚であり、⁽⁴⁴⁾李顥は恩蔭出身の文班官僚であったことが判明している。⁽⁴⁵⁾

また睿宗二年（一一〇七）のいわゆる九城の役に際して派遣された作戰軍は、次のような三軍の編成を取っていた。⁽⁴⁶⁾

中書侍郎平章事尹瓘（行營元帥）

知樞密院事吳延寵 (副元帥)

尙書左僕射金漢忠 (中軍兵馬使)

左常侍文冠 (左軍兵馬使)

兵部尙書金德珍 (右軍兵馬使)

右に元帥というのは兵馬使と同じく作戰軍の軍司令官のことで、ここでは宰臣・樞密(宰樞)クラスの官人に與える職銜として特にその威望を高めるために、兵馬使ではなく元帥という稱號を與えているのであろう。右の五人のうちでは尹瓘・吳延寵・金漢忠・文冠の四人が、それぞれ科擧官僚であったことが判明している。^④

最後にもう一つ、仁宗十三年(一二三五)正月に、高麗國が西京の亂(妙淸の亂)を平定するために派遣した作戰軍の編成は次のとおりである。^⑤

中軍 平章事金富弼、參知政事任元敦

左軍 吏部尙書金富儀

右軍 知御史臺事李周衍

『高麗史』には軍司令官としての官銜は明示されていないが、恐らくそれは金富弼が中軍兵馬元帥、任元敦が副元帥、金富儀が左軍兵馬使、李周衍が右軍知兵馬事というものであったろう。^⑥ 中軍にのみ二人の軍司令官が置かれているのは、文宗三十四年の文正の場合と同じように、金富弼が三軍全體の總司令官をも兼ねているため、中軍の實際の指揮の方はもう一人の任元敦に委ねる意圖であったのではないかと考えられる。もっとも任元敦は後に命ぜられて都城に留衛したという^⑦から、作戰現地には實際には派遣されていない。ともあれ右の四人のうちでは金富弼・任元敦・金富儀の三人が、それぞれ科擧官僚であったことが判明している。^⑧

このように、高麗前期の軍司令官には主として科擧官僚が任命されていた。いわゆる武臣の亂以降、高麗後期に入ると、この科擧官僚中心の慣例が崩れて、上大將軍などの三品以上の武臣もまた、しばしば軍司令官に任命されるようになっていくことは、これもすでに邊太燮氏の研究によって明らかにされているとおりであるが、しかしここで誤解してならないのは、その上大將軍といえども科擧官僚と同様に平時には各領の指揮系統からは外されている存在であって、彼らが軍令權を行使し得るのは軍司令官に任命されている、その作戰期間に限ってのことにか過ぎなかったということであろう。

威嚴と人望とを兼ね備えた文武三品以上の最上級の官人が、軍令權を擔つて王京以外の地方州縣へと派遣されていくということは、潜在的には常に軍事クーデターの危険性を孕んだ兩刃の劍として、軍令權の分散化をもたらすものとして警戒されなければならない事柄であった。だからこそ軍司令官の持つ軍令權は、その作戰期間に限ってのみ、國王から一時的にしか委ねられることがなかったのであって、毎年春夏・秋冬の六箇月交替で派遣される兩界兵馬使^②などを除いては、高麗前期においては軍司令官の任命はほとんど數える程度にしか行われることはなかったのである。

軍令權の集中は、なによりもよく中央集權體制の安定を示す事柄であったといえよう。

四 府兵の崩壊と私兵

ところが高麗後期に入ると、打ち続く戰亂の中にあつて中央集權的な國家支配の體制はにわかに動搖を來し、王權における軍令權の集中が崩れて軍司令官による各種の私兵が形成されるようになってくる。このような私兵化の動きはつとに高麗後期の武臣執權期から兆し始めていたものであるが、ここでは朝鮮初期兵制への展望を切り開いていく目的から、特に高麗末期の私兵を中心として、その軍令權の構造の變質の過程を明らかにしておきたい。

これまでも繰り返し述べてきたとおり、高麗國軍の主力は三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍によって構成されていたが、この各領一千人の軍額は、高麗後期に入ると戦争・飢饉その他の要因によって、ほとんど恒常的に闕員を來すようになってしまう。再び『高麗史』李藏用傳の記述によれば、

比年、兵・荒に死す。千人と曰うといえども、その實は然らず。⁵³⁾

というのが後期の偽らざる實情であったのである。

軍人階層ばかりではない。誤って靖宗十一年（一〇四五）五月の條に懸けられている高麗後期のある時の掲榜によると、各領一千人の軍人層（丁人）は國王の扈從から内外の力役まで、あらゆる軍役を負担する根幹的な階層であったが、このごろ禍亂を経て各領一千人の軍額に多くの闕員が生じるようになったため、軍人層の負擔していた軍役は校尉・隊正などの下級の指揮官層にまで轉嫁され、このため校尉・隊正などの下級の指揮官層もまた軍人層の後を追って凋落していくことになったという。⁵⁴⁾ また『高麗史』元宗世家、高宗四十六年（一二五九）閏十一月甲申條の記述によると、このころ「校尉・隊正は、死する者大半」であったとまで言われている。⁵⁵⁾ 府兵制度の崩壊には、その立役の裏づけとなる田制の崩壊などの経済的な要因が大きく作用していたものと思われるが、その他にも高宗朝の約三十年間に及んだモンゴル軍の侵攻などが、こうした軍人層・下級指揮官層の凋落にほとんど決定的な影響を與えていたことは言うまでもあるまい。

それではこの府兵制度の崩壊に伴う戦闘要員の缺乏は、高麗後期においては一體どのような手段を以て補われることになっていたのであろうか。

そもそも高麗國において何らかの作戦軍が必要とされる場合には、三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍の中からその必要部分を召集して三軍を編成し、この三軍を臨時に任命される軍司令官に委ねて派遣するというのが、制度本來のあり方であったことについてはすでに考察したとおりであるが、モンゴル軍の侵攻や倭寇など、廣範圍にわたって長期間の戦

爭狀態が續いた高麗後期にあっては、ただでさえ闕額の目立つ府兵の派遣はとてものことでは追いつかず、不足する兵力は軍司令官が作戰現地において臨時に徵發するという手段が、しばしば便宜的に用いられていたようである。

國家、寇盜連年、兵は團結せず。危急に至るごとに、兵を農より徵す。⁵⁶

『高麗史』兵志、兵制、恭愍王十一年（一三六二）六月條に見える右の監察司（舊の御史臺）の上言にも述べられているとおり、高麗後期においては府兵の編成（團結）がほとんど崩壊してしまっていたことの結果として、軍司令官の率いる軍隊は中央において編成したうえで派遣される府兵ではなく、むしろ作戰現地において臨時に徵發される農民兵によって構成されるようになっていたのである。

この種の臨時に徵發された軍隊のことを、高麗後期には一般に「別抄」と稱している。別抄の別抄たる所以は、本來の府兵がある一定以上の經濟基盤を有する良人身分の農民層によって編成されていたことに對し、そうした經濟基盤や身分の有無には拘わらず、専ら軍人としての膂力のあるものを徵發していったところにあるのであらう。⁵⁷ そうしてこの本來は臨時の徵發にしか過ぎなかった別抄の制度は、次第にある一定の軍額として固定化されるようになっていくが、しかしこの別抄によっても兵力が不足する場合には、軍司令官は作戰現地において、更に臨時の徵發を行うことも稀ではない。

體覆使郭璇、全羅道より還りて奏すらく、元帥、原定別抄の外において、また煙戸軍を抄し、また別軍を抄す。民まさに農を失せんとすと。乃ち煙戸軍と別軍とを罷めて歸農せしむ。⁵⁸

『高麗史』兵志、兵制、辛禡二年（一三七六）五月の條に見える右の體覆使郭璇の奏文は、具體的には全羅道元帥河乙沚による不法な徵發行爲を彈劾したものであるが、これはなにも河乙沚だけに限ったことではなく、多かれ少なかれ各道の軍司令官は、そのすべてが同じような徵發行爲を行っていたのであらう。

前朝の季、各道軍民、戸數籍無し。凡そ抄軍時、妄意に數を定め、勒して數に充てしむ。弊を作すこと少なからず。⁵⁹

『太祖實錄』六年（一三九七）二月甲午條に見える右の都評議使司の上言にも述べられており、高麗末期の軍司令官たちは、ほとんど任意に農民兵を徵發し、このため農民の生産活動が妨げられて、社會的にも様々な弊害を生み出すまでになっていたのである。

軍司令官がその作戰現地において獨自に軍隊を編成するようになっていったことは、その軍隊の指揮・命令のあり方にも大きく變化をもたらすことになっていった。前にも述べたとおり、本來の作戰軍は各領の府兵によって編成され、その各領の府兵は平時からの指揮官である將軍によって統率されることになっていたのであるが、府兵の編成が崩れて將軍による統率がその本來の機能を果たし得なくなってしまうと、高麗末期の軍司令官たちは、自らの編成した軍隊を統率するために鎮撫と呼ばれる幕僚を辟召し、この自ら辟召した幕僚を通して配下の軍隊を直接に掌握するようになっていったのである。高麗末期の軍司令官たちは、それだけ直接的に軍隊を掌握するようになっていったということができであろう。しかもさらに問題となるのは、作戰現地において徵發した別抄その他の農民兵を、高麗末期の軍司令官たちが牌記⁶¹と呼ばれる軍籍に登録し、これを中央には申告せずに、自己の私兵として私物化する傾向が生じるようになっていったということである。

例えば『高麗史節要』恭愍王十四年（一三七〇）五月條の記述によると、このころ東西江都指揮使に任命されて東江に出鎮していた崔瑩は、新しく東西江都指揮使に任命された金續命に對してその軍隊を引き渡さず、そのまま兵を引き連れて田獵に明け暮れていたとして彈劾されている。⁶²

軍司令官の配下の軍隊は、本來ならその任務を終えればただちに後任の軍司令官へと引き渡されることになっていたはずであるが、その際、肝心の軍籍（牌記）が中央權力によっては把握されていなかったために、有力な軍司令官たちは必ず

しも軍隊のすべてを引き渡さず、その一部のものは自己の私兵として私物化する傾向が生じるようになってしまった。『高麗史節要』はこの崔瑩の田獵のことを、「私兵を以て、大いに東郊に獵す」と記述しているが、それはまさしく私兵として、すなわち軍司令官が軍令權の濫用を通して私的に掌握するようになってしまった軍隊として、位置づけられるようになっていたのである。

こうした私兵が形成されるようになったことは、やはり何といっても宰樞クラスの威望の高い官人たちが、ほとんど恒常的に軍令權を掌握するようになった高麗末期の政治的・軍事的環境に、その要因を求めなければなるまい。

實際、高麗末期における倭寇の跳梁と、その結果として生じた作戰地域の廣域化、作戰期間の長期化に伴って、本來臨時の官職にしか過ぎなかった軍司令官は、このころほとんど常設の官職にまで轉化してしまう傾向を示していた。例えば文武三品以上の官人を以て派遣することになっていた兵馬使は、これを廣範圍にわたって一々中央から派遣しては、出沒極まりない倭寇に對應することはとてもできないので、高麗末期の辛禡元年（一三七五）には、各道の牧・都護・知官などの守令に兵馬使の職を兼任させ、軍興時にはそのまま軍司令官として各道の軍隊を統率させるという方針が打ち出されている。⁶³ そうしてこの守令の兼任する兵馬使や、中央から別途に派遣される兵馬使などを全體として統轄するためには、宰樞クラスの官人の中から各道に派遣される民政巡察官としての都巡問使が、軍興時にはそのまま元帥を兼ねることによって、各兵馬使に對する總司令官としての役割を勤めることになっていく。⁶⁴ しかしこの都巡問使が元帥を兼ねるという制度も、倭寇の侵害が甚だしくなるとだんだん元帥だけでは對應しきれなくなってしまう、元帥二員を加發して、各道三元帥の體制が確立するまでに肥大化していく傾向を示していた。⁶⁵

このように、本來臨時の官職にしか過ぎなかった元帥・兵馬使などの軍司令官は、高麗末期においては倭寇の廣域化、

長期化に伴ってほとんど常設の官職にまで轉化してしまい、そうしてこの常設の官職と化した軍司令官には、宰樞クラスの威望の高い官人たちが、おおむね六箇月交替でほとんど引つ切りなしに派遣されていかなければならなくなってしまったのである。このため司令官職への就任を通してほとんど恒常的に軍令權を掌握するようになっていった宰樞クラス⁽⁸⁶⁾の官人たちが、文臣・武臣を問わず、その威望を背景としていわゆる私兵を形成するようになっていくことは、ほとんど必至の勢いであつた。

宰樞クラスの最上級の官人たちが、その威望を背景として如何に軍令權を濫用するようになっていたか——そうした事柄の一端を、高麗最末期に成立した三軍都摠制府の設立の経緯を通して、いささか間接的にではあるが檢證してみることしよう。

『高麗史』恭讓王世家、二年（一三九〇）十一月條の記述によると、三軍都摠制府を創設して李成桂（朝鮮太祖）が中外の軍令權を掌握した際に、「各道の將帥を罷めてその軍人を放つた」⁽⁸⁷⁾ことが記録されているが、そもそも倭寇全盛のこの時期に地方の軍隊をすべて解散するなどということはあり得ないから、ここで各道の將帥というのは實際には王京における各道の留京將帥のことであり、軍人を放つたというのはその留京將帥の下⁽⁸⁸⁾の私兵を放つたということではないかと考えられる。

朝鮮初期の宗親・大臣たちは、各道留京節制使（節制使は舊の元帥・兵馬使）に任命されることを通して各自の私兵勢力を形成し、侍衛・別牌・私伴儼などの名目の下にその私兵を上京させて、陪從や田獵などの様々な勞役に使役していたといわれているが、これと同じような現實は、すでに高麗最末期においても軍司令官による軍令權の濫用の問題として議論の對象となっていたのである。

近年以來、各道節制使、先を争いて牒を下し、道内郡縣及び京畿の農民をして、無事の時といえども、累朔京に居らしむ。人馬疲困し、民怨甚たり。……今後、才智兼ねて全き者を揀んで節制使と爲し、その額數を定めて中外の軍士を統べしめ、その餘の節制使は、一皆革罷し、外方及び京畿の郡縣の軍民も、またみな放還し、農を勸め業に安んぜしめて、以て邦本を固められんことを。

『高麗史』兵志、兵制、恭讓王二年（一三九〇）十二月條に見える右の司憲府（舊の御史臺）の上狀のうち、各道節制使というのは恭讓王元年（一二二八）の制度改革で改められた舊の都巡問使・元帥などのことであるが、ここで問題となっているのはこれら各道に實際に派遣されている節制使の濫設を革めるということとともに、いやそれ以上に王京に留衛しているいわゆる留京節制使の濫設を革めるということではないであろう。そうしてその留京節制使たちが軍令權を濫用し、各道の農民兵をほとんど恣意的に徵用して「累朔京に居らしめ、これを様々に使役していた」という現實こそが、軍制改革の一番の對象とならなければならなかったのである。

軍令權の濫用を通して私兵勢力を形成していった宰樞クラスの官人たちは、その政治的・軍事的な發言力を背景として留京節制使という官職を獲得し、この官職を通して軍令權をほとんど恒常的に掌握することに成功する。それは一つには王京の守りを固め、かつは外方へといつても軍隊を派遣することができるよう、あらかじめ軍司令官を任命しておいた制度として評價することもできるであろうが、むしろ現實には宰樞クラスの官人たちが事實として形成していた私兵の存在を、制度の上からも追認したものとして捉えられることの方が妥當であろう。恭讓王三年（一三九一）正月における三軍都摠制府の設立は、こうした私兵の現實を一旦否定して、李成桂（朝鮮太祖）のもとに軍令權の集中を回復させるための措置であったのだが、現實には宰樞による私兵の勢力を完全には克服することができなかった。このため、朝鮮開國後には宗親・大臣を各道留京節制使に任命することによって、再び私兵の現實を追認しなければならないことになったのである。

宰相各々元帥と稱し、一民もその有にあらざるなし。^①

三軍都摠制府の設立に際して述べられた右の恭讓王の發言は、單に各道に派遣されている元帥（節制使）の存在のみを問題としているわけではない。むしろ本來ならその軍令權を解除すべき各道の留京元帥（節制使）たちが、その宰樞としての威望を背景として軍令權を掌握し、これを濫用し續けている現實をこそ問題としているのであって、言い換えればこの宰樞クラスの官人たちが掌握している私的な軍令權を如何にして王權の下に回収していくかということが、次代朝鮮朝へと持ち越されていく最も大きな政治課題の一つとならなければならなかったのである。

おわりに

高麗前期における中央集權的な軍事體制は、高麗後期における様々な國難を通して、私兵勢力の分立の状態にまで大きく變質を遂げていかなければならなかった。その變質の過程をできるだけ構造的に把握することを通して、私は次代朝鮮朝における私兵勢力の克服と、その後の中央集權的な軍事體制の確立とを展望する一つの有效な視座をも探り當てておきたいと考えていたのであるが、そうした朝鮮朝への展望に繋げる意味で、最後にもう一つ、高麗末期における兵制上の重要な變化を擧げておくことにしよう。それは各種の軍司令官による私兵の形成と並行して、王權それ白體が一種の私兵を形成するようになっていったということである。

高麗における宿衛の制度が、そもそものようなものであったのかは、あまりはっきりとは分かっていないが、恐らくそれは王京に番上している二軍六衛の各領の軍人の内、その一部のものが數日ごとに輪番して宮中に入直するという形を取って行われていたものと考えられる。^②しかし府兵制度の崩壊に伴って宮城内に入直する府兵の勢力が手薄になってくる

と、高麗後期にはこれを強化するために各種の特別の軍隊が編成されるようになっていった。

『高麗史』兵志、宿衛の條に見える毅宗朝の「内巡檢」や明宗朝の「衛國抄猛班」、元宗朝の「後壁」などは、いずれもその種の特別編成の軍隊であって、それらは多かれ少なかれ國王その人によって養われる私兵としての性格を帯びつつあったものと考えられる。事元期に入るとこの種の傾向は一層強くなって、忠烈朝には忽赤(ゴルチ)、恭愍朝には近侍衛などの成衆官が次々と編成されるようになってくるが、この成衆官というのは要するに國王の私屬であり、文武百官の官制外にあつて廣く宮中の庶務を執り行うもののことをいうのである。

成衆官の中には、もとより内侍・茶房・司衣・司彝などのように直接には軍務とは關係のないものも含まれているが、その一方では後代朝鮮朝において禁軍の一つである別侍衛へと發展していく司循のように、宿衛軍としての中核的な機能を果たしていたものも存在していたことを忘れてはなるまい。

この種の成衆官は本來文武百官の官制外の存在であるから、それ自體としては定員もなく祿俸もないことが建前となっているが、實際には國王によって私的な給與(別賜)が與えられていることの外に、一定期間の勤務を満たすと各領の散員以上の西班牙職に任命され、この西班牙職によって祿俸を受け取ることができるような仕組みが慣例として出來上がっていたのである。ただしそれは祿俸を受け取るための形式だけの任命であつて、實際には西班牙職としての勤務は行わず、引き続き成衆官としての宮中の勤務のみを行っていく場合の方がほとんどであつた。^⑧つまり官制内の存在である西班牙職は、官制外の存在である成衆官に對する寄祿の官——祿俸を支給する際の名目上の官職——として流用されるようになっていったということである。

このように西班牙職のポストが流用されるようになっていったのは、府兵制度の崩壞に伴つて、西班牙職そのものがすでにその職掌を喪失しつつあつたからに他ならない。本來各領一千人の軍人層を指揮するための指揮官職として位置づけられ

ていた西班牙職は、その指揮すべき軍人層の凋落によって職掌の空洞化を來し、單に祿俸を受領するだけの形式的な官職にしか過ぎなくなっていた。だからこそ西班牙職は成衆官などに對する寄祿の官として、しばしば容易に流用されるようになっていったのである。^⑦

そうした西班牙職の流用は、國王の私兵・私屬を祿養するという意味では、ある程度私的權力としての王權を強化することにはなったであろう。とはいえ西班牙職の形骸化をもたらしただけという意味では、本來の王權體制を決定的に弱体化させ、無力化させてしまったことは争われない。高麗末期の王權は、結局のところ自らを一つの私兵勢力にまで貶めなければその宿衛の兵力を維持することはできなかったのである。

しかしこのように脆弱な王權を以てしては、十四世紀末葉における東アジア世界の多難な國際環境を乗り切っていくことはできなかった。李氏朝鮮による革命は、ある意味ではこの脆弱な王權を當時最強の私兵勢力の一つであった李氏權力にすぐ替えることによって、王權そのものの抜本的な強化を圖り、この強化された王權のもとに軍令權の集中を、延いては中央集權的な國家體制を回復していくための試みであったと見なしておくこともできるであろう。

注

(1) 『高麗史』卷一百一、李藏用傳。時、永寧公綽、在蒙古言、高麗有三十

八領、領各千人、通爲三萬八千人。若遣我、當盡率來、爲朝廷用。史丞相、召藏用、至中書省、問之。藏用曰、我太祖之制、蓋如此、比年死於兵荒、雖曰千人、其實不然、亦猶上國萬戶牌子頭數目、未必足也。請與綽東歸點閱、綽言是、斬我、我言是、斬綽。綽在側、不敢復言。

(2) 『高麗史』卷八十一、兵志一、兵制、顯宗九年九月條。御宣化門、集三衛・鷹揚軍・功臣子孫、及文班六品以下、有武藝者、試定科等。

(3)

『宣和奉使高麗圖經』卷十一、仗衛、龍虎左右親衛旗頭條。龍虎左右親衛旗頭、服毬文錦袍、塗金束帶、展脚幘頭、略類中朝服度。持小旗施、以令六軍、蓋軍衛之隊長也。惟王府之內、衛者一人、使者至、則置一人於（鄭刻有兵字）仗內、乘馬前導。蓋所以待（鄭刻侍）使人而供給、皆輟侍王之人。禮至於此、可謂至矣。

同右、龍虎左右親衛軍將條。龍虎左右親衛軍將、亦服毬文錦袍、塗金束帶、幘頭兩脚折而上、右勢微屈、飾以金花。王出入、則十餘人、執羽扇・金鉞、以從。

同右、神虎左右親衛軍條。神虎左右親衛軍、服毳文錦袍、塗金束帶、金花大帽、仍加紫帶、繫於領下、如紘纓之屬、形製極高、望之巍然。昔齊永寧中、高麗使至、服窮袴、冠拒風。中書郎王融、戲之曰、服之不衷、身之災也。頭上定是何物。答曰、此（鄭刻、有則字）古弁之遺像也。今觀高帽之制、其拒風之俗、今猶然也。

同右、興威左右親衛軍條。興威左右親衛軍、服紅文羅袍、以五采團花、點綴爲飾、金花大帽、黑犀束帶。王之左右、二十餘人、出則執螭文繡花大扇・曲蓋、扈從前後。常服、自龍虎・神〔虎・興〕威以下、皆以紫帽、無金飾。諸衛中、惟此一等、人質差偉焉。

* 龍虎・神虎・興威の三親衛にのみ金飾があり、諸衛中、これらの三親衛だけは軍人としての資質もやや優れていたという右の記述から、三親衛の保勝軍・精勇軍が高麗國軍の中核兵力として位置づけられていたことを窺うことができる。

(4) 末松保和氏の研究によれば、この登錄兵數の記錄は神宗七年（一二〇四）から高宗二年（一二一五）までの十二年間、すなわち蒙古軍の侵入直前の時代のもものと推定されている（末松「高麗の四十二都府について」）。

(5) 『高麗史』卷八十三、兵志三、州縣軍、序。高麗兵制、大抵皆倣唐之府衛、則兵之散在州縣者、意亦皆屬乎六衛、非六衛外、別有州縣軍也。然無可考、姑以此目之。

(6) 三十八領三萬八千人の府兵に多數の副員が生じていたことについては、本篇第四節において考察するところである。

(7) 『大唐六典』卷五、兵部郎中條。凡兵士隸衛、各有其名、…總名爲衛士、皆取六品已下子孫、及白丁無職役者、點充。凡三年一簡點、成丁而入、六十而免、量其遠邇、以定番第（百里外五番、五百里外七番、一千里外八番、各一月上。二千里外九番、倍其月上。若征行之鎮守者、免番而遣之。凡衛士、各立名簿、具三年已來征防若差遣、仍定優劣爲三等、每年正月十日、送本府印訖、仍錄一通送本衛。若有差行上番、折衝府

據簿而發之（若征行及使、經兩番已上者、免兩番。兩番以上者並二番。其不免番者、還日即當番者、免上番）。
(8) 『高麗史』卷七十八、食貨志一、田制、田柴科、穆宗元年十二月條、當考。

* 折衝府の官人は地方州縣に所在するといえ中央の六衛に所屬する中央官である。従つて折衝府の官人が中央の文武官人とともに併記されていることは官制上當然の措置として理解しておかなければならない。この點については、『羣書考索』後集卷四十、兵門における章如愚の按語に、「唐之府兵、雖散在諸道、然折衝都尉、並遙隸於諸衛、乃是內任官。故官志、係於諸衛之後、不與外官同」とある考え方が参考になる。

(9) 『高麗史』卷三、成宗世家、九年九月丙子條。教曰、…折衝府別將趙英、葬母家園、朝夕祀之。…趙英超十等、授銀青光祿大夫・檢校侍御司憲・左武侯・衛翊府郎將、仍賜公服一襲、銀三十兩、綵二十匹。

(10) 『世宗實錄』二十年九月壬辰條。議政府據兵曹呈啓、西班牙三品以下將士、專以禁暴禦侮而設、其卒徒僕從、不可不衆。自上護軍、至于司勇、大以使小、卑以事尊、大小尊卑、各有等級、其來尚矣。至於使令之設、隊正則統十人、伍尉則率五人、十司每領隊正二十人、伍尉四十人、各有統屬、故總謂之六十。六十之號、自高麗至于本朝、常稱之。

* 右に述べるとおり、朝鮮朝では各領の隊正二十人、伍尉四十人を總じて六十と稱していたが、このうち隊正の下には十人の軍人が統率され、伍尉の下には五人の軍人が統率されていたといわれている。これは伍尉二人の率いる十人の軍人を隊正一人が統率するという意味であるから、各領の隊正二十人、伍尉四十人のもとには全體として二百人の軍人が統率されていたことになるであろう。もとよりこれは朝鮮朝における數字であるが、各領の下級の指揮官（高麗では校尉二十人、隊正四十人）を總じて六十という制度は高麗以來のものであるから、その六十によって統率される各領軍人の當番數が高麗以來二

百人であった可能性も、一概には否定できない。

(11)

『經國大典』兵典に規定する主要な番上兵の當番總數は、宣傳官八員、兼司僕五十員、內禁衛一百九十員、親軍衛二十員、別侍衛三百員、甲士二千九百六十員、吹螺赤二百二十八員、太平簫十二員、濟州子弟三十員、破敵衛五百員、壯勇衛二百二十員、隊卒六百員、彭排一千員、計五千九百八十八員となっている。正兵の當番兵數は『經國大典』には明記されていないが、『成宗實錄』二十四年閏五月己未條の記述によると、その「上番する者は幾ど二千餘人に至る」というから、この正兵二千人を加えても大體一萬人足らずということになるであろう。

高麗の當番兵數を假に七千六百人と想定した場合、これに長番兵の七千人と、指揮官職の三千五百二十六人（後述）を加えれば合計一萬八千二百二十六人となって、朝鮮朝の當番兵數よりはかなり上回っているという想定になる。

なお『高麗圖經』仗衛の序には、「其六軍上衛、常留官府。其留衛王城、常三萬人、迭分番以守」という記述があるが、ここで「常に三萬人」というのは、三萬人（三十八領三萬八千人）の全てが常に王京に駐留しているという意味ではあるまい。それは朝鮮朝の當番兵數と比べても餘りにも過大な數字である。そうではなくて、延べ三萬人の番上兵が、個々人としては「迭に分番して以て守り」ながら、軍隊としては「常に官府に留」まっているということであろう。

(12)

『高麗史』卷七十八、食貨志一、田制、田柴科、穆宗元年十二月條、當考。

(13)

『高麗史』卷七十八、食貨志一、田制、祿科田、恭讓王三年五月條の記述によると、高麗末期における京畿・六道の實田總數は、六十二萬三千九百七十七結である。

(14)

李基白「高麗軍役考」、『高麗兵制史研究』一五七～一五八頁、參照。

(15)

『高麗史』卷七十八、食貨志一、田制、田柴科、文宗三十年條、當考。別將・校尉・隊正は本來折衝府の官制であって、唐制、諸衛には別

將・校尉・隊正は存在しない（ただし諸衛の左右翊中郎將府には校尉・隊正は存在するが）。穆宗朝の田制において校尉・隊正が諸尉校尉・諸尉隊正と記述されているのも、それが折衝都尉・果毅都尉に所屬する折衝府の官制であったことを明確に示している。これらが中央の六衛に移屬するようになるのは、折衝府の撤廢以後のことであろう。

(17)

『高麗史』兵志、兵制、文宗二十三年三月條。判、諸州一品別將、則以副戶長以上、校尉則以兵倉正・戶正・食祿正・公須正、隊正則以副兵倉正・副戶正・諸壇正、試選弓科而差充。

『高麗史』選舉志、鄉職、文宗二十三年三月條。判、別將則副戶長以上、校尉則兵倉正・戶正・食祿正、隊正則副兵倉正・副戶正・諸壇正、並弓科試選、兼差。

(18)

『世宗實錄』二十年四月甲寅朔條。議政府據禮曹呈啓、外方各官鄉吏公服、有特賜犀帶者、並皆還收、改賜玳瑁黑犀帶。又有戶長、僭用玉環者、並皆禁斷。高麗舊制、外方鄉吏、比朝官文武班、戶長有大相・中尹・左（佐）尹之號、記官有兵正・獄正之號、都軍有都令（領）・別正（將）・校尉之號。故都軍、至今稱爲將校。由是、大官鄉吏、例用犀帶・象笏・玉環・玉環。至本朝、皆禁之。

(19)

『宣和奉使高麗圖經』卷十一、仗衛一、控鶴軍條。控鶴軍、服紫文羅袍、五采間、繡大團花爲飾、上折脚襪頭、凡數十人、以奉詔興。王與入使、私觀往來、則奉箱篋。

*控鶴軍が近仗軍（鷹揚軍・龍虎軍）に相當することについては、『世祖實錄』十年八月壬午朔に見える同知中樞院事梁誠之上書に、「控鶴軍曰近仗」とある記述が參考になる。唐制では則天武后の聖歷元年に控鶴監を置いて近侍の官と爲したという先例がある（『資治通鑑』唐紀、聖歷元年二月條、同一年正月條）。

(20)

『高麗史』兵志、兵制、文宗四年十月條。判、近仗將校、以諸領府將校中、御選有身彩多功勞者、充差。

*將校という言葉は將相と對をなして各領の指揮官職を指す言葉であるが、『高麗史』兵志、兵制、文宗二十五年十月條に、「判、發鎮將相・將校鞋脚米」として將軍以下・郎將以上、攝郎將以下・散員以上、校尉・隊正、借隊正の四つの階層に對する鞋脚米の支給量を規定している。このうちの散員以上が將相、校尉・隊正・借隊正が將校にそれぞれ相當するものと考えられる。散員以上と校尉・隊正とで區別する論據については本稿第二節において詳論する。

(21) 『宣和奉使高麗圖經』卷十一、仗衛一、金吾仗衛軍條。金吾仗衛軍、服紫寬袖衫（疑衫字）圈著（鄭刻者）幘頭。以采上束、各隨其方之色、方爲一色、開繡團花爲飾、執持幢蓋儀物、立於閭闔門外。

『宣和奉使高麗圖經』卷十二、仗衛二、千牛左右仗衛軍條。千牛左右仗衛軍、服緋窄衣、首加皮弁、黑角束帶。腰有二櫜、飾以獸文。手執小戈、上貫一鼓、其制如鞬。亦執畫戟・鐙杖・豹尾之屬。與此服飾、皆一等也。

(22) 『大唐六典』卷五、兵部郎中條。凡千牛備身、備身左右、及太子千牛、皆取三品已上職事官子孫、四品清官子、儀容端正、武藝可稱者、充。

(23) 『高麗史』卷八十一、兵志一、兵制、文宗二十三年十月條。判、軍人年老・身病者、許令子孫親族代之、無子孫親族者、年滿七十間、屬監門衛。至海軍、亦依此例。

『宣和奉使高麗圖經』卷十二、仗衛二、官府門衛校尉條。官府門衛校尉、服紫文羅窄衣、展脚幘頭、右佩長劍、拱手而立。考其所任之職、總轄兵階、戰陣獲敵首、不願賜銀者、次第選補、以留王府、守衛諸門。自會慶門、置左右親衛將軍外、其餘、內則廣化、外則宣義諸門、皆有之。至於寺觀官府、時亦用焉。然服與人材、皆所不逮、當是一時旋置、以他名色人充代、非一等品秩也。

(24) 『高麗史』卷八十三、兵志三、工役軍、明宗二十一年八月條。分外方役軍爲三番。舊制、諸州一品軍、分爲二番、當秋而遞、使之循環、比緣營造、合而役之、至是分焉。

*右には「當秋而遞」とあるが、その立役は原則として秋から春までの農閑期に限られていたのではないかと思う。

(25) 朝鮮初期の兵制では、原則として王京への番上義務を負わない地方軍のうち、各道の都節制使營や各鎮の僉節制使營に番上するものを營鎮屬、居住地州縣にのみ立役するものを守城軍といつて區別した。この營鎮屬・守城軍の區別は、あたかも高麗の二三品軍の區別に相當するのではないかと考えられる。

(26) 『太祖實錄』三年二月己亥條。判義興三軍府事鄭道傳等、上書曰、…一、將兵者、位卑則順從上命、易於役使、安守其分。今朝廷、雖有都督・指揮・千戶、而掌兵者、百戶也。前朝雖有中樞・兵曹・上大將軍、而掌兵者、將軍也。此長治久安之策也。本朝府兵之制、已有此意、使將軍掌五員・十將・六十尉正、其大將軍以上、無與焉。各道州郡之兵、亦命兵馬使以下掌之。節制使、以時糾察兵馬使之勤慢、則體統相維、兵雖衆而無不戢之患。上從之。

(27) 『高麗史』卷二百二十七、李資謙傳。有洪立功者、將軍劉漢漢下中郎將也。資謙以漢卿入內、即以立功爲借將軍、帥兵、聽俊京指揮。俊京使立功、領卒六十餘人、擔柴、至都省南路、…

(28) 『高麗史』明宗世家、十一年七月己卯條。是夜、自壽昌宮北垣投石、抵御寢北廂者三四。宿衛皆驚、巡索禁垣、竟不得。重房奏請、每夜一將軍、領手下軍校、伏兵宮門外及諸要害處、以備警急。從之。

*兵志、宿衛にも同文の記述がある。

(29) 『韓國金石全文』三七五、申甫純墓誌。公年未弱冠從軍、二十五歲、受會冲下隊正、毅宗七年壬申、拜守珎下校尉、辛巳、崔漑下散員、乙酉、彥漑下別將。

(30) 『韓國金石全文』四五五、金仲龜墓誌。以大金明昌五年甲寅、起家、補康陵直、明年冬、投筆、拜金吾衛仗領散員、神宗奇之、召入內侍、尋轉爲別將、加將軍純永下郎將。

*底本は金吾衛仗領散員を使領散員に誤っているが、意を以て改め

た。兵志、兵制に見える金吾衛役領とは、實はこの仗領の誤りなのではないであろうか。

(31)

『世宗實錄』十八年閏六月癸未條。上曰、東班則既設九品、而又置權務之職、西班牙雖有九品隊長・隊副、爲流外庶人之職、除授西班牙者、率皆超拜八品、有違於循資之法。加設九品、以革其弊。議政府啓曰、三軍五員、則每一軍、革司直四、副司直十、司正十四、副司正五十二、每軍加設正從九品、各八十。三軍甲士、總五十領、革副司直・司正、各一、副司正五。每一領、加設正從九品、各七。正九品則稱進武副尉、從九品則稱進義副尉、並以司勇稱號。祿科、並依正品。從之。

(32)

『宣和奉使高麗圖經』卷二十一、阜隸、散員條。散員之服、紫羅窄衣、幘頭革履、如中華班直・殿侍之類也。武臣子弟、兵衛出職、皆補之。每人使至、則捧盤・授爵・執衣・侍巾、皆用之。

* 右に出職というのは宋の官制用語で、一般には胥吏が出官すること(初めて差遣を受けること)を意味している。ここでは一般軍人がその軍役を勤め上げて、初めて西班牙職を受けることを出職と稱しているのである(『中國歷史大辭典』宋史卷、一九八四年、上海辭書出版社)。

兩班子弟が散員を以て起家する事例を幾つか挙げておく。この種の事例は特に高麗後期において頻見するようである。

(33)

『高麗史』金方慶傳。金方慶、字本然、安東人。高宗朝、年十六、以蔭補散員、兼式目錄事。

『高麗史』閔宗儒傳附閔思平傳。思平、字增夫、少有器局、政承金倫、號知人、以女妻之。學日進、試補散員、別將、不樂武資、讀書益力、忠肅朝、登第、調藝文春秋修撰。

『高麗史』崔雲海傳。崔雲海、字浩甫、通川郡人。父祿、護軍、有功於高麗之戰、恭愍王追念其功、授雲海忠勇衛散員、累轉典工摠郎。

『東文選』卷一百二十九、安景恭墓誌。公諱景恭、字遜甫、蚤承家庭之訓、略無執紼之習、溫良孝悌、本於天性。至正二十五年乙巳(恭愍十四年、一三六五、年十九)、補散員、明年、超拜郎將、兼司憲糾正。

『太祖實錄』五年九月己巳條。漢山君趙仁沃卒。仁沃、漢陽人、版圖判書日敦之子。仕恭愍朝、授散員、累遷至上護軍。

(34)

『太祖實錄』七年三月己巳條。前密直使金先致、卒。先致、尙州人、判宗簿寺事君實之子。仕前朝、初拜散員、遷至郎將。

『高麗史』卷六十八、禮志十、嘉禮、參上・參外・人吏・掌固、謁宰樞、及人吏・掌固、謁參上・參外儀。肅宗二年五月判。凡內外衙門、員以上、坐床治事。大朝會日、進歩起居。平時揖而不拜。宰樞廳・參上廳內、參外階上、人吏・掌固沒階、行禮。參上廳・參外廳內、人吏・掌固沒階、行禮。參外廳、人吏階上、掌固沒階、行禮。外官廳、長典・記官、並沒階、行禮。西班牙則攝郎將以上、准參上。散員以上、准參外。校尉・隊正、准人吏。旗頭・都典、准掌固。庶人見常參以上、起身唱喏經過。

(35)

『宋史』卷一百八十七、兵志一、禁軍上。建隆以來之制、騎軍、散員(左右班四。周制、招置諸州豪傑立。散指揮・散都頭・散祗候、凡十二班。又於北面驍捷員僚直及諸軍內、簡閱填補。咸平五年、定州路都部署王超言、緣邊有強梁輩、常居四界、擾動邊境。請厚給金帛、募充散員。從之。

(36)

朝鮮初期の兵制では、各領の指揮官職はしばしば五員十將として總稱されていた。これは各領の校尉・隊正がその員額にちなんで六十と呼ばれていたことと同じように、散員・別將などの員額にちなんで總稱であろうと思われるが、『高麗史』百官志に見える員額のとおり考えると、各領の指揮官職は將軍一人、中郎將二人、郎將五人、別將五人、散員五人の計五員十三將となつて、五員十將の總稱には合わなくなつてしまふ。この點、恭愍朝に設けられた忠勇四衛の員額は、衛ごとに將軍一人、中郎將二人、郎將五人、散員五人の計五員十將となつていたので、むしろこの忠勇衛の員額の方が二軍六衛の各領の員額の本來の姿を留めているのではないかと考えられる(『高麗史』兵志、兵制、恭愍王五年九月條、當考)。

ただしこの五員十將の總稱は、朝鮮初期に入ると、専ら將軍以外の中郎將(司直)、郎將(副司直)、別將(司正)、散員(副司正)のことを指して用いられるように變質してしまっているようである。

三軍という數は『周禮』大司馬の序に見える中國周代の兵制にちなんだもので、そこでは天子の六軍に對して「諸侯は、大國は三軍」という軍數が定められていた。この三軍という數から中國に對する諸侯國としての高麗國の自己認識が窺われるが、高麗後期に入るとこの三軍の制度は崩れて五軍に擴張されるようになっていく。

ちなみに、周制の一軍は一萬二千五百人というから、三軍では三萬七千五百人となる。高麗三十八領三萬八千人という軍額は、この周制から導き出された多分に理念的な數字である、ということもできるであろう。

『高麗史』卷七十七、百官志一、外職、兵馬使の條に、「兵馬使、成宗八年、置於東西北面、兵馬使一人、三品、玉帶紫襪、親授斧鉞、赴鎮、專制閩外」とあるが、これは東北面・西北面以外の地に派遣される兵馬使についても同じことである。なおこの兵馬使が文武三品以上の官人を以て任命されることも、やはり『周禮』大司馬の兵制を踏まえたもので、そこでは「軍將はみな卿より命ず」、つまり軍司令官には卿身分のものが任命されるということになっていた。高麗の官制では文武三品以上のものがこの卿の身分に當たるので、このような『周禮』の理念をも踏まえて、兵馬使には文武三品以上の官人が任命されていたのである。

『高麗史』卷十九、明宗世家、七年九月辛丑條。遣上將軍李義政、領八將軍、討西北賊。

『高麗史』卷二十、明宗世家、二十三年十一月壬辰條。以上將軍崔仁爲南路捉賊兵馬使、大將軍高湧之都知兵馬事、率將軍金存仁・史良柱・朴公襲・白富公・陳光卿、往討之。

(41) 前掲注(27)、參照。

(42) 邊太燮「高麗朝の文班と武班」

(43) 『高麗史』卷九、文宗世家、三十四年十二月己未朔條。東蕃作亂、以中書侍郎平章事文正、判行營兵馬事。同知中樞院事崔爽、兵部尚書廉漢爲兵馬使。左承宣李顥、爲兵馬副使。將步騎三萬、分道往擊之、擒斬四百三十一級。

(44) 『高麗史』卷九十五、文正傳。

(45) 『高麗史』卷九十五、李子淵傳によると、李子淵の子の李顥は、文宗が李子淵の女を納れて妃と爲した際に、その恩蔭によって軍器主簿を授けられている。このとき李子淵は内史侍郎平章事の地位にあったが、このような宰臣の子弟が恩蔭を以て起家する場合に、一般には軍器注簿同正の位階を授けられることになっていた。

(46) 『高麗史』卷九十八、尹瓘傳。

(47) 同右、尹瓘傳。及び卷九十五、金漢忠傳。卷九十六、吳延寵傳、文冠傳。

(48) 『高麗史』卷十六、仁宗世家、十三年正月戊申條。妙清・柳岳・趙匡等、以西京反。辛亥、以金富弼、爲元帥、討之。

『高麗史節要』卷十、仁宗十三年正月戊申條。於是下詔、以金富弼・任元數、爲中軍師、金正純・鄭旌淑・盧令珪・林英・尹彥頤・李瑱・高唐愈・劉英、爲之佐。吏部尚書金富儀、將左軍、金旦・李愈・李有開・尹彥政、爲之佐。知御史臺事李周衍、將右軍、陳淑・梁祐忠・陳景甫・王洙、爲之佐。

(49) 『高麗史』百官志、外職、兵馬使條に、「兵馬使、成宗八年(九八九)、置於東西北面。兵馬使一人、三品、玉帶紫襪、親授斧鉞、赴鎮、專制閩外。知兵馬事一人、亦三品。兵馬副使二人、四品。兵馬判官三人、五六品。兵馬錄事四人」とあるが、これらの員額は必ずしも常に満たされていたわけではない。要は司令官職に就くものの本官が正三品の場合には兵馬使といい、從三品の場合には知兵馬事といい、正四品の場合には兵馬副使といったことであろう。判官・錄事などはそ

の司令官職の辟召する幕僚である。

(50) 『高麗史』卷九十五、任元厚傳（初名元敦）。

(51) 同右、任元厚傳。及び卷九十七、金富儀傳。卷九十八、金富弼傳。

(52) 末松保和「高麗兵馬使考」

(53) 『高麗史』李藏用傳。前掲注（1）、參照。

(54) 『高麗史』卷八十一、兵志一、兵制、靖宗十一年（二〇四五）五月條。

揭榜云。國家之制、近仗及諸衛、每領設護軍一・中郎將二・郎將五・別將五・散員五・伍尉二十・隊正四十、正軍訪丁一千（訪、衍字？）、望軍丁人六百。凡廩駕・内外力役、無不爲之。比經禍亂、丁人多闕。丁人所爲賤役、使祿官六十代之。因此、領役艱苦、爭相求避、伍尉・隊正等、未能當之。若有國家力役、乃以秋役軍・品從・五部坊里各戶刷出、以致騷擾。今國家太平、人物如古、宜令一領各補一二百名、除京中五部坊里、各司從公令史・主事・記官、有蔭品官子、有役賤口外、其餘兩班及内外白丁人子、十五歲以上・五十歲以下、選出充補、使選軍別監、依前田丁連立。其領内十將・六十有闕、除他人、竝以領内丁人、遷轉錄用。中禁・都知・白甲別差、亦以丁人當差。丁人戶、各給津貼、務要完恤。復立都監、擇公廉官吏掌之、勿令容私。如有飾詐求免者、着枷立市、決杖七十七下、配島。指揮人、竝徵銅。其間、諸宮院及兩班等、以丘使・賤口拘交、造飾求免者、宮院所掌員・兩班、則勿論職之有無、依例科罪。諸衙門詐稱通糧丘使、追祿名簿、知情規避者、亦皆科罪。

* 右の史料の繫年を疑う論據のひとつは、「この頃禍亂を経て」だとか、その禍亂が収まって「今國家太平、人物古の如し」だとかいうような歴史的狀況が、概して平穩そのものであった靖宗朝には全く見いだすことができないということである。そこでこの靖宗朝への繫年を何らかの原因による錯簡と見なし、こうした歴史的狀況にぴったり適合する「十一年五月」を靖宗朝以外において檢索すると、元宗十一年（一二七〇）五月、モンゴル軍との講和がようやく成立して江華島から

舊都開城府に復都した際の歴史的狀況が、これに最も相應しいものとして想起される。行文中、「都監を復立する」とあるのは高宗三十九年（一二五二）八月に立てられた「充實都監」を復立させることであると思われるので、この點においても元宗十一年（一二七〇）五月というのは右榜文の内容に最も適合する歴史的時點であると言ふことができるであろう。

ただし右の榜文には、「護軍」「伍尉」などの事元期以降に初めて現れる官職名や、「決杖七十七下」という、これも事元期に固有の特殊な決杖數が用いられていることなどから判斷して、元宗朝當時のそのまの文言とは認められない部分が少なくない。これらは官牘史料を傳承する過程において、これを現實に施行しなければならぬ必要上、事元期の現狀に見合った形に元々の史料を書き換えたり、書き改めたりしたことがあったのではないかということを示唆している。いずれにせよ、これは靖宗朝の高麗前期の史料ではなく、むしろ高麗後期の史料として取り扱わなければならないであろう。

なお、中國元朝では杖七下から杖一百七下に至る特異な決杖數が用いられていたことは、例えば『元史』刑法志などにも述べられているとおりであるが、高麗でも一時期この元制の決杖數を用いていたことは、次に列記する三つの事例によって明らかである。

『高麗史』恭愍王世家、十四年四月丙午條。以知平州事李守貪汚、杖百七、除名。『高麗史』崔瑩傳。（辛禡）五年、新定君馬珂秀、與其子占匿良民、事覺、繫獄。：竟杖珂秀一百七、并杖其子致遠・希遠、皆流之。珂秀道死。『高麗史』成石璘傳。伯淵之獄起、辭連石璘、杖百七、配威安戍卒。

(55) 『高麗史』元宗世家、高宗四十六年（一二五九）閏十一月甲申條。兩府請除授百官。太孫讓曰、我雖監撫、至於選授、非所敢專、必待君父之還。兩府固請曰、我國專賴領府、以爲藩垣。今校尉・隊正、死者大半。不可不填闕。太孫勉從之。乃除五品以下。

(56)

『高麗史』卷八十一、兵志一、兵制、恭愍王十一年六月條。監察司上言、國家寇盜連年、兵不團結、每至危急、徵兵於農、非惟擾民、亦無救於倉卒。自今、選練丁壯、以備緩急。

* 右のように高麗末期には一般農民兵にまで廣く動員が及ぶようになっていたが、本來の作戰軍は三十八領三萬八千人の保勝軍・精勇軍を以て編成され、その他の州縣兵には動員は及ばないことになっていた。この點について、鄭道傳は次のように述べている。

『太祖實錄』三年二月己亥條。判義興三軍府事鄭道傳等上書曰。前朝盛時、唯府兵外、無他軍號、北有大遼、東有女直・日本、侵掠於外、又有草賊、往往竊發於中、小則中郎將以下、大則遣上將軍・將軍・禦之、至於不得已、而後發郡縣兵。外攻內守、傳至四百餘年、當時府兵之盛、可知。

(57)

經濟基盤や身分の有無を問わない新しい形の徵兵は、早くは肅宗九年十二月における別武班の召募から始まったものである。このとき王京においては文武散官・吏胥より商賈・僕隸に至るまでのあらゆる身分階層のものが召募の對象となり、また地方の州縣においても恐らくはその身分を問わずに軍隊の召募が行われて、凡そ馬を自辨できるものは神騎軍に、できないものは神歩軍に、それぞれ編成されている。また武臣執權期には崔瑀が勇士を召募して夜別抄を編成し、これが有名な三別抄の基となったわけであるが、この召募の際にもいわゆる勇士の經濟基盤や身分などは不問に付されていたであろう。このように、別抄の軍隊は本來は自發的な召募によって編成されていたものと考えられるが、府兵制度の崩壊に伴って、次第に強制的な徵發という色合いを強くしていったものと考えられる（以上は並びに『高麗史』兵志、兵制の記述に據る）。

(58)

『高麗史』卷八十一、兵志一、兵制、辛禡二年五月條。體覆使郭璇、還自全羅道、奏曰、元帥於原定別抄外、又抄煙戶軍、又抄別軍、民將失農。乃罷煙戶軍與別軍、歸農。

(59)

『高麗史』卷一百十四、河乙沚傳。時、乙沚簽軍於定額外、又簽煙戶軍及別軍、民頗失業。體覆使郭璇、還奏之、即罷新簽二軍。

(60)

『太祖實錄』六年二月甲午條。使司上言、前朝之季、各道軍民、戶數無籍、凡抄軍時、妄意定數、勒令充數、作弊不小。

(61)

『太祖實錄』辛禡六年八月條。高麗末、官不籍兵、諸將各占爲兵、號曰牌記。大將若崔瑩・邊安烈・池龍壽・禹仁烈等、募僚士卒、有不如意、詬罵無所不至、或加榜極、至有死者、麾下多怨望。太祖性稟嚴重簡默、平居常閉目而坐、望之凜然、及至接人、渾是一團和氣。故人皆畏而愛之、其在諸將中、獨禮接麾下、平生無諍語、諸將麾下、皆願屬者。

* 牌記とは、もともとは軍籍のこと。この軍司令官の作成した軍籍を牌記と稱したところから、その軍籍に登録された軍人そのものを牌記（牌記兵）と稱するようになったのであろう。

(62)

『高麗史節要』恭愍王十四年五月條。慶千興・崔瑩、以私兵、大獵于東郊。妖僧遍照、譖崔瑩、貶爲雞林尹。照時主密直金蘭家、蘭以二處女視瑩。瑩責蘭、照疾之。及瑩出獵、遂譖之。王遣判開城府事李珣、讓之曰「卿爲東西江都指揮使、倭入昌陵、取世祖眞、而卿不知、以金續命代卿、卿不以軍授續命、率其兵、田獵無時、何也。雖予不言、臺諫其怨卿乎。今以卿尹雞林、可急之任」。瑩聞命、嘆曰「今之得罪者、鮮克保全、吾得雞林而往、亦是聖恩」。遂行。

* 指揮使については、『高麗史』忠烈王世家、二十七年五月庚戌條に「本國舊例、凡大官出鎮邊境者、令帶指揮使之名」とある記述が参考になる。思うに指揮使というのは予想される軍興に對處するためにあらかじめ派遣される軍司令官のことで、軍興時に派遣される元帥・兵馬使とはその點が性格を異にするのであろう。

(63)

『高麗史』卷七十七、百官志一、外職、大都護府條。辛禡元年、牧・都護・知官、皆帶兵馬之職。

(64)

都巡問使はもともと民政官であるが、軍興時には元帥を兼ねる慣例になっていたので、事實上は司令官職としても意識されていた。この

(65)

點については『高麗史』兵志、兵制、辛禔二年條に、「今後每當興師之際、令各道都巡問使、兼元帥」とある記述が参考になる。そうしてこの司令官職としての都巡問使が、恭讓元年には都節制使に改められ、朝鮮朝の兵馬都節制使へと受け継がれていくことになるのである。なお都巡問使や元帥は恭讓王元年以前には皆京官を以て口傳（口頭任命）していたというが、このこともまた司令官職の本来持つ臨時的な性格を表す事柄の一つといつてよいであろう（後掲注（70）、参照）。『高麗史』卷八十一兵志一、兵制、辛禔五年正月條。諫官上言、易曰、長子帥師、弟子輿尸、凶。今元帥甚衆、令出多門、故體統紊亂、紀綱不立、請依舊制、置一元帥、餘則罷之、加以他號、並聽元帥節制。又倭賊日熾、侵掠諸道、而國家待其告急、然後遣將出師、道里悠遠、將帥垂至、而賊已浮海、不及與戰、假令與戰、併日倍馳、軍馬疲困、屢至敗績。請於諸道、預遣將帥、寇至則擊之。

同右、六年六月條。諫官上疏曰、興師動衆、不能無弊、故遣將帥、宜有節制、國家已於各道、置三元帥、一道之任、宜專委三元帥、近來一有小寇、三元帥外、別遣諸元帥・諸兵馬使、非惟委任不專、卒無成功、往返之間、民受其苦。乞自今、令本道之任、專委三元帥、隨其成敗、以明賞罰、仍乞各道元帥、依六道都巡察使軍目、統率本道軍官、毋得奪占、以致紛擾。

(66)

*辛禔五年の段階では各道二元帥の舊制に復すべきことを主張していた諫官が、次の年には各道三元帥の制度を遵守すべきことを主張している。軍司令官の派遣がそれだけ濫發されていたという證據である。高麗末期の私兵権力者たちは、必ずしも武臣のみに限られない。例えば朝鮮太祖（李成桂）の最大のライバルの一人であった沈徳符は、西海道元帥、東北面上元帥、西京都元帥などの司令官職を通してその私兵勢力を形成していった人物であるが、彼はもともと恩蔭出身の文班官僚であつて、辛禔朝に密直副使を以て西海道元帥に任命されるまでは、軍隊には全く關與していなかったものと考えられる（『高麗

(67)

史』卷一百十六、沈徳符傳）。『高麗史』恭讓王世家、二年十一月辛丑條。憲府言、今中外軍事、既以領三司事李（成桂）都摠之。請悉收諸元帥印章。從之。

(68)

同右、癸卯條。罷各道將帥、放軍人。

(69)

『太祖實錄』元年七月丁酉條。命宗親及大臣、分領諸道兵。『恭靖王實錄』二年四月辛丑條。罷私兵。司憲府兼大司憲權近、門下府左散騎金若采等、交章上疏曰、…又況外方各道軍馬、分屬諸節制使、或稱侍衛、或稱別牌、及私伴僮、番上之煩、徵發之擾、其弊甚多、陪從之衆、田獵之數、其勞亦極。人飢馬困、暴露雨雪、直宿私門、衆心怨咨、甚可憫也。方今巨弊、莫甚於此。願自今、悉罷各道留諸節制使、以京外軍馬、盡屬三軍府、以爲公家之兵、以立體統、以重國柄、以攝人心、除兩殿宿衛外、私門直宿、一皆禁斷、朝路毋令私伴、持兵根隨、以應古者家不藏兵之意、以防後日交猜構亂之端、國家幸甚。疏上、上與世子議之、即令施行。是日、放諸節制使所領軍馬、悉還其家。

(70)

『高麗史』卷八十一、兵志一、兵制、恭讓王二年十二月條。憲司上狀、我國百姓、有事則爲軍、無事則爲農、故軍民一致。近年以來、各道節制使、爭先下牒、使道內郡縣及京畿農民、雖無事時、累朔居京、人馬疲困、民怨爲甚、非唯貢賦百姓、至於鄉社里長、亦皆隸屬、不利於國、不便於民。今後擇才智兼全者、爲節制使、定其額數、使統中外軍士、其餘節制使、一皆革罷。外方及京畿郡縣軍民、亦皆放還、勸農安業、以固邦本。從之。

(71)

『高麗史』卷七十七、百官志一、外職、節制使條。節制使。恭讓王元年、改都巡問使爲都節制使、元帥爲節制使、或帶州府之任。先是、巡問・元帥、皆以京官口傳、至是、始用除授、以專其任。置經歷・都事。四年、罷經歷・都事、復置掌務錄事。

『高麗史』卷一百十九、鄭道傳傳。省五軍爲三軍都摠制府、以道傳爲右軍摠制使。道傳辭曰「三軍之作、臣在中朝、憲司所建白、臣不知也。然罷元帥爲三軍、以臣爲摠制使、則諸帥失職者、必快快曰「道傳革元

帥、自爲摠制。怨刺並興。臣又不便弓馬、不敢當。且革私田、改冠服等事、皆非臣所爲也、左右皆目臣。臣又冒處是任、則讒言日至、臣其危乎。願更命他人」。王曰「大國三軍、古制也。中爲權臣所廢、宰相各稱元帥、一民莫非其有。今革元帥、立三軍、此復古之機也。摠制寔重任、議諸兩侍中、以卿爲之。卿母辭」。道傳曰「儻有讒言、請勿納、永保微臣」。遂不辭。王悅。

宮中に入直する宿衛軍として、高麗前期には中禁班・都知班・白甲班などの軍隊が存在したようである。これらは二軍六衛の軍人のうち、その一部のものが所屬の領役を兼ねて勤務する、いわゆる別差という形をとって編成されていたらしい（前掲注（54）、「中禁・都知・白甲別差、亦以丁人當差」。高麗前期の宿衛軍は、これらの中禁班・都知班・白甲班などが中心となり、各領の軍人がその補佐となつて運営されていたのであろう。

『太祖實錄』三年二月己亥條。判義興三軍府事鄭道傳等上書曰、一、司楯・司衣・司幕・司舞・司饗、右件愛馬、乃前朝之季添設、宜在革去、而各有差備、似難卒革。然都目爲頭者、受諸領之職、以本番事務無閑、不得隨領。因此、以致侍衛虛疎。今將各領削除祿官之數、於司楯第一番、置司直一、副司直一、司正二、副司正二、給事三、副給事三。其餘三番、及各愛馬、皆用此例、以都目爲頭員將、次第遷轉、去官。如此、則有其事者食其祿、食其祿者事其事、名實相稱、不相侵亂、庶乎平矣。

* 右に都目というのは勤務記録一覽（都目狀）に基づいて官職を除授すること。爲頭というのはその任官順位の一位で、二位のことは之次

という。成衆官（成衆愛馬）はこの都目によって諸領の職に進出していたのである。

(74)

各領指揮官職の形骸化について、鄭道傳は次のように述べている。

『太祖實錄』三年二月己亥條。判義興三軍府事鄭道傳等上書曰、一、自忠烈王事元以來、每因中朝宦寺・婦女・奉使者之請、官爵汎濫、皆以所托之人、除衛職、恃勢驕蹇、莫肯宿衛、由是府衛始毀、始置忽赤・忠勇等愛馬、姑備宿衛。及僞朝、法制大毀、凡受府衛之職者、徒食天職、不事其事、遂至失國、此殿下之所親見。

主要參考文獻

末松保和「高麗兵馬使考」「高麗の四十二都府について」（『末松保和朝鮮史著作集』五、所收、一九九六年、東京、吉川弘文館）
内藤雋輔「高麗兵制管見」（『朝鮮史研究』所收、一九六一年、京都、東洋史研究會）

*

*

*

車文燮「朝鮮時代軍制研究」（一九七三年、ソウル、檀大出版部）

千寛宇「近世朝鮮史研究」（一九七九年、ソウル、一潮閣）

閔賢九「近世朝鮮前期軍事制度の成立」（『韓國軍制史』近世朝鮮前期篇、陸軍士官學校韓國軍事研究室編、一九六八年、陸軍本部）

邊太燮「高麗朝の文班と武班」（『高麗政治制度史研究』所收、一九七二年、ソウル、一潮閣）

ソウル、一潮閣

李基白「高麗兵制史研究」（一九六八年、ソウル、一潮閣）